

## 団地（密集家庭）における母子保健の再検討に関する研究

——昭和39年度厚生科学研究「母子衛生に関する特別研究」——

研究班長 副所長 内藤 寿七郎

### I 緒 言

最近都市周辺に団地が急増し、それとともに、団地の母子保健に関する問題が、いろいろといわれてきた。

はたして母子保健に関する問題で、一般家庭にくらべ、何か団地の特殊性というものがあるのであろうか。団地の良い点、悪い点、又よりよい団地の母子保健を望む為には、どういう点に注意すればよいのであろうか。

全貌をつかむのはなかなか困難であるが、我々は、産科、小児科、栄養、心理教養面の各方面からそれを追究しようとして、協力研究調査した。

今回はそれぞれの立場から次の課題について各班員が調査を分担した。

〔課題〕 〔研究班員名〕

(1) 団地の産科学的考察

—特に産科的異常の頻度について—

(研究第1部) 渡内 次郎  
鈴木 善雄

(2) 団地における母乳栄養の実態について

(研究第2部) 高橋悦二郎  
佐野良五郎

(3) 団地の離乳期乳児及び幼児の食生活調査

(研究第4部) 武藤 静子  
山内 愛  
栗原 長代  
佐伯美代子  
横井 基子

(4) 団地内での乳幼児の事故

(研究第2部) 松波 昭夫  
曾根 秀子

(5) 団地における母子関係

(研究第8部) 星 美智子  
湯川 礼子

### II 団地の産科学的考察

—特に産科的異常の頻度について—

(1) 目 的

団地は建物の構造、其の他の点で特殊な環境を形成していると云われるが、我々は、この様な条件下に於ける妊娠分娩について関心をもち、調査を始めた。

(2) 調査方法

偶々母子衛生研究会が各団地に於て乳児検診を行つたので、愛育病院の産科専門医は昭和39年11月より昭和40年2月に至る間、診療の一部を割き、これに6回参加し、そこに集つた母親に面接してアンケートを作成した。集つた母親の殆んどは昭和38年以降分娩した児を伴っており、その期間、流産や死産を経験した婦人は来ていながつたので、これらに就いての調査は出来なかつた。

(3) 対 照

愛育病院が昭和39年1年間に於て診療した自宅居住

者の妊娠分娩例を対照として選んだ。但し附表には人工妊娠中絶の52例を含ませていない。

(尚、愛育病院に於ける妊娠分娩の異常傾向については自宅群、アパート群、団地群はどれも全体の傾向に略々等しく、マンション群は例数少く判断の値は少い。)

(4) 妊娠より分娩に至るまでの分析

1) 「つわり」については治療を要すると思われるもののみを計上したが、団地は自宅群の5倍を示した。

2) 切迫流産も団地は自宅群の5倍を示した。

3) 切迫早産も団地は自宅群より多く、但し早産は自宅群に多い。

4) 妊娠中毒症は団地の方が自宅群より1%だけ多い。

5) 異常分娩は団地は自宅群の2倍を示した。

6) 団地に於て、2階以下の居住者群と3階以上の居住者群とを比較してみると、異常の発生頻度は3階以上が2階以下の倍であることを示した。

#### (5) 分娩後の母子の状態

- 1) 児の出生時体重は平均 3,119g で標準よりやや良い。
- 2) 未熟児の出生は5%であった。
- 3) 性器の復故不全は8%であった。
- 4) 母乳分泌の良好ならざるものは6.5%であった。
- 5) 月経再開までの平均は3.5ヶ月であった。

#### (6) 妊娠分娩に関する社会医学的考察

- 1) 予定日より15日以前に分娩したものが5%あり、其平均日数は28日であった。
- 2) 予定日より15日以降に分娩したものは4%であり、平均は20日であった。
- 3) 分娩場所については実家に於ける分娩1例を除く他は全部施設分娩であり、団地より施設までの所要時間は平均22分間であった。(但し74例につき聴取)
- 4) 希望児数については2乃至3名と答えたものが97%あり(75例につき聴取)、大部分のものは家族計画について考えていた。
- 5) 受胎調節を考慮していないものは31%あったが、その中の一部分は現在妊娠しており、他の大部分は次の妊娠を希望していることにもよるものであることが解つた。
- 6) 既往妊娠1乃至2回のものが85%を占め、これは団地居住者の結婚継続期間が未だ短いことを示している。
- 7) 団地生活で不便を訴えたものは3階以上で31名、45%、2階以下では1名、3%であった。

### Ⅲ 団地に於ける母乳栄養の実態について

#### 1. 緒 論

近年都市に於ける母乳栄養児の減少がとみに目立つてきた。この原因には種々の社会的、文化的要因があると思われるが、私共は主として母性意識という立場から母乳分泌の諸因子について検討した。

実験方法は、あらかじめ妊娠中に子供の栄養法として母乳栄養、混合栄養、人工栄養のいずれを選択するかという態度を明らかにさせ、その母親の産後の母乳分泌状況と実際の栄養法を調査した。

この実験は先に Niles, Rumely, Neuton 等によつて、ペンシルバニア大学附属病院の産婦人科に入院した産婦91名に対して実験され、又我々も昨年愛育研究所附属

#### (7) 考 案

最近、東京医科大学の高橋等は中層住居の婦人衛生に及ぼす影響調査(1965年3月)に於て、妊娠中毒症、流産、流産傾向が2階以上の居住者に多発する傾向が、かなり著しいと推測しているが、我々の調査結果も略、同様のことを示唆しているように思う。

今回の調査は我々にとつて初めての試みであり、途中種々の困難、例えば、乳児検診が主体であったため切角集つた全部の母親に面接出来なかつたこと、一人一人の対象者からこちらが意図した事項について、時間の都合上、充分聴取出来なかつたこと、上記検診が数十回行われているに拘らず、こちらが6回しか陪席出来なかつたこと等々を経験した。

今後は周到な計画に基き、広範にして微細な統計学的調査を必要とする。そのためには各種機関と連携を密にし、産科専門医の下に多数のケースワーカーの如き補助者を動員出来る態勢を整えることが重要であると思う。

#### (8) 結 論

- 1) 妊娠分娩に対し団地生活は自宅生活に比し、かなり著しい悪影響を及ぼしている。
- 2) 団地生活に於ては、3階以上の居住者に妊娠分娩異常が明らかに多いと思われる。
- 3) 以上の原因として、社会心理学的な考察も必要であろうが、明らかに指摘出来る点は建築構造上の問題で、殊に高層になる程、階段の昇降は妊婦と胎児に対し医学上極めて悪い影響を与えているものと推察される。
- 4) よつて団地の住居については衛生工學上から改めて検討し直すことが焦眉の急であると考えらる。

病院産婦人科に於て分娩した産婦188名について実験し、明らかに有意の差をもつて母乳を選択した母親に母乳分泌の良好であることを認めた。

今回団地の母子保健というテーマの一環として団地の母親の母乳栄養選択の態度と母乳栄養の実態を調査していささかの知見を得たのでここに報告する。

#### 2. 調査方法及び調査対象

昭和39年11月より昭和40年1月末日迄の間に、府中、前原、下倉田、松原、柳沢の5団地の母親125例に対して個人的に面接し、夫々の栄養法を選択について回答を求め併せてその児の生后1週間目、1ヶ月目、4ヶ月目の栄養法をも調べた。なお妊娠中に母親の主婦以外の

症 状 名	A. 「団地における階層別調査」 (前原、柳沢、府中、西原団地)												B. 対照資料……「愛育病院診療記録より住居状況別調査」 —但し主症状のみ— (昭和39年1ヶ年間)								
	二階以下			三階以上			合 計			対 照		そ の 他 (参考)				合 計					
	主症状	重複	計	主症状	重複	計	主症状	重複	計	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%		
つわり (中等度以上)	5	6	11	17	10	27	22	20.0	16	38	35.0	54	7.5	3	7.0	9	8.5	1	8.5	67	7.5
切迫流産	7	4	11	14	1	15	21	19.0	5	26	24.0	41	5.5	2	4.5	9	8.5	2	16.5	54	6.0
流産												51	7.0			12	11.0	2	16.5	65	7.5
切迫早産				3		3	3	3.0		3	2.5	2	0.5	1	2.0	2	2.0	1	8.5	6	0.5
早産		1	1	2		2	2	2.0	1	3	2.5	42	6.0	3	7.0	2	2.0	2	16.5	49	5.5
妊娠中毒症	6	3	9	6	3	9	12	11.0	6	18	16.5	110	15.5	6	13.5	16	14.0	1	8.5	133	15.0
異常分娩	6	2	8	8	5	13	14	13.0	7	21	19.5	67	9.5	5	11.5	12	11.0	2	16.5	86	10.0
鉗吸引	2						2			2		3		2		1				6	
帝王切開				1		1	1			1		24		2		6		1		33	
骨盤位	3			6		6	6			6		8								8	
胎位不正					5	5	3		5	8		15			2					17	
娩遅延												2			1					3	
出血多量	1	2		1			2		2	4		8		1		2			1	12	
死産												2								2	
計	24	16	40	50	19	69	74	68.0	35	109	100.0	367	51.5	20	45.5	62	57.0	11	91.5	460	52.0
△主症状計に対する%	32.5			67.5			100.0														
×症状合計に対する%		36.5			63.5				100.0												
正 常 (異常なし)	17			18			35	32.0				347	48.5	24	54.5	45	43.0	1	8.5	417	48.0
合 計 (調査対象)	41			68			109	100.0				714	100.0	44	100.0	107	100.0	12	100.0	877	100.0
○調査対象に対する%	22.0			46.0			68.0	(32.0)	(正常)												

(註) Aにおける「重複」は主症状以外の他症状を指す。

5 藤 他 : 団地 (密集家庭) における母子保健の再検討に関する研究

仕事の有無、偏食の有無、少女時代に育つた環境、スポーツを学生時代にどの位やつたか等について回答を求めた。又母乳を選択した理由及び混合栄養、人工栄養を選んだ理由をも調査した。対照例として当愛育病院産婦人科に於て分娩した妊婦184例に対し（団地居住者を除外す）調査を行つたものである。

### 3. 調査成績

調査人員は第1表の如く府中団地が最も多く次いで松原、前原、柳沢、下倉田の順で合計125名である。団地に於ける各種栄養選択群をまとめたのが第2表である。母乳選択群は意外に多く125例中95例で76%を占め、対照例の76.6%とほぼ同様な結果が見られている。

母乳栄養を選択する理由をまとめたのが第4表である。免疫、栄養上の点から母乳を選択した者が一番多く48.4%を占めている。しかしこれは対照例の84.5%（第6表）に比し明らかに下廻つている。

「便利である」と答えたのが14.7%、「経済的である」と答えたのが5.3%あるのは対照例に見られない点であつた。混合栄養を選択する理由をまとめたのが第5表である。

「栄養上の点より」と回答したものは30例中14例で46.7%で最も多く、「母乳不足のため」が20%、「外出等とき便利」が16.7%、「母乳嫌いのため」と答えたのが10%認められた。これに比し、対照例（第7表）では母乳不足が圧倒的に多く48.5%を占め、次いで仕事のために仕方なく混合又は人工を選んだと回答したのが22.3%であつた。又対照例では栄養のために混合栄養、又は人工栄養を選んだのはわづかに19.5%であつた。これは明らかに団地と異なる点であつた。

第1表 団地別の調査人員数

調査人員		人	員
団地名			
府中	団地	32	名
松原	〃	31	〃
前原	〃	20	〃
柳沢	〃	17	〃
下倉田	〃	15	〃
合	計	125	名

第2表 各種栄養選択群の分類

選 択	調査人員	人	員	(%)
母乳選択群		95	名	76.0%
混合	〃	21	名	16.8%
人工	〃	7	名	5.6%
不	明	2	名	1.6%
合	計	125	名	100%

第3表 選択分類 対照例（愛育病院）

選 択	調査人員	人	員	(%)
母乳選択群		141	名	76.6%
混合	〃	28	名	15.2%
人工	〃	15	名	8.2%
合	計	184	名	100%

第4表 母乳栄養を選択する理由

理 由	調査人員	人	員	(%)
免疫、栄養上の点より		46	例	48.4%
愛惜の点より		27	〃	28.4
便利である		14	〃	14.7
経済的である		5	〃	5.3
そ の 他		3	〃	3.2
合	計	95	〃	100%

第5表 混合栄養、人工栄養を選択する理由

理 由	調査人員	人	員	(%)
栄養上の点より		14	例	46.7%
母乳不足のため		6	〃	20.0%
外出等の時便利		5	〃	16.7%
母乳嫌いのため		3	〃	10.0%
そ の 他		2	〃	6.6%
合	計	30	〃	100%

第6表 母乳栄養を選択する理由 対照例（愛育病院）

理 由	調査人員	(%)
免疫、栄養上の点より		84.5%
愛惜の点より		10.1%
そ の 他		5.4%
合	計	100%

第7表 混合栄養、人工栄養を選択する理由

対照例(愛育病院)

理由	調査人員 (%)
母乳不足	48.5%
仕事のあるため	22.3%
栄養上の点より	19.5%
離乳がしにくいため	6.0%
その他	3.7%
合計	100%

次に児に対する栄養法の実態をまとめたのが第8表である。

母乳栄養を選択した者95名中、生後1週目の母乳栄養児は37例で39%、生後1ヶ月目までは46.3%と増加し、4ヶ月目までは又減少してわずか23.2%しか母乳栄養は与えられていなかった。対照例では、1週間目が82.9%、1ヶ月目が51.2%、生後4ヶ月が32.8%という数値を示している。(第9表 a、b、c)

第8表、第9表(a、b、c)より生後1週間目の母乳栄養の数は対照例に多く、団地では明らかに低い数値を示している。1ヶ月目及び4ヶ月目の数値は殆んど同じ傾向を示している。

なお妊娠中の主婦以外の仕事の有無、偏食の有無、少女時代に育った環境、スポーツを学生時代にどの位やったか、という点について回答を求めた。それらの因子が母乳の分泌と何等かの関係をもっているかということ調べてみたが、今回の調査では何等の関係も見出すことは出来なかった。

第8表 児に対する栄養法(団地)

母乳栄養 選択	生後1週目 まで	生後1ヶ月 目まで	生後4ヶ月 まで
母乳選択群 95名	37例(39.0%)	44例(46.3%)	22例(23.2%)
混合 21名	5例(23.8%)	5例(23.8%)	4例(19.1%)
人工 7名	1例(14.3%)	2例(28.6%)	1例(14.3%)
不明 2名	1例(50%)	1例(50%)	0
合計 125名	64例	52例	27例

第9表 栄養法 対照例(愛育病院)

a. 生後1週目までの児の栄養法

選 択	栄養法	母乳栄養	其の他の法
母乳選択群 141名		116名 (82.9%)	25名 (17.1%)

b. 生後1ヶ月目までの児の栄養法

選 択	栄養法	母乳栄養	其の他の法
母乳選択群 121名		62名 (51.2%)	59名 (48.8%)
米院しなかつた者 20名			

c. 生後4ヶ月目までの児の栄養法

選 択	栄養法	母乳栄養	其の他の法
母乳選択群 76名		25名 (32.8%)	51名 (67.2%)
調査出来なかつた者 45名			

第10表 全国都市に於ける母乳栄養の実態

(昭和35年調査—厚生省)

月 数	1ヶ月	2ヶ月	3ヶ月	4ヶ月
母乳栄養	62.8%	56.0%	49.3%	46.2%

#### 4. 考 按

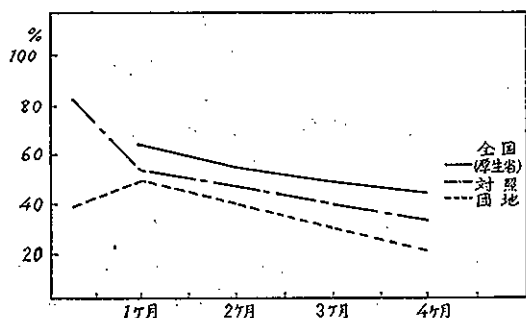
近年都市に於ける母乳栄養に対する母親達の関心が薄れているようにいわれている。そして、それを裏書きするように都市に於ては母乳栄養が減少の傾向をたどっていることも事実である。我々はその実態をつかむ為に、先きに愛育病院に於て分娩した母親達を対照例とし、団地に住む母親達の母乳栄養に対する態度と、その母乳栄養の実態を調査した。母乳栄養は子供のために必要であるという点では、第2.3表の如く両者は殆んど同じ傾向であった。併し母乳栄養を選ぶ理由と、混合栄養、人工栄養を選んだ理由の中には、第4~7表の如く異なる傾向のあることが認められた。即ち免疫、栄養上の点から母乳を選んだのは団地で48.4%、対照例では84.5%、又混合栄養、人工栄養を選ぶ場合に団地ではその理由の中で「栄養上の点から」46.7%「母乳不足」20.0%であった。対照例では「母乳不足」48.5%、「仕事があるため」22.3%、「栄養上の点から」19.5%であった。以上の例数が少ないのでその結果から団地の母親の意識や態度を判断するのは早計であるが、何か団地の母親が混合栄養、人工栄養を選ぶ場合の態度の中に人工栄養が児の栄養法として栄養的にすぐれているという意識がかなり強くあつたことを我々は認めた。実際に団地に於いて、母乳が充分にあるのに栄養的に人工栄養が母乳よりすぐれているという考えのもとに栄養法が切りかえられたという症例がかなりの数に認められた。以上のよ

うな相違が何によつておこるかという点について推察すると、団地が特種な環境というのではなく、むしろ対照例が東京都に於ける山の手地方の比較的教育程度の高い(短大以上)人が多かつたということと病院側の母乳栄養に対する指導が他の施設よりも行き届いていたという特殊の条件も無視してはならない重要な因子の一つであると思われる。

次に児に対して行われた栄養法を検討してみると、第1図の如く、団地の場合も対照の場合でも共に昭和35年度に厚生省の調査した都市に於ける母乳栄養の率より減少の傾向を示して、これは、都市に於て、母乳栄養が年々減少している旨指摘される傾向の現われと考えられる。(第10表参照)

又第1図に見られるように団地では1週間目の母乳栄養は39%、1ヶ月目に46.3%と増加し、又4ヶ月目に23.2%と急減しているが、対照例では生後1週間目では82.9%と非常に高率で母乳栄養がスタートされていることが注目される。ただし1ヶ月目には51.2%、4ヶ月目には32.8%と対照例でも又急減の傾向をとつている。対照例の場合には、ほぼ毎月1回の保健指導に於いて母乳栄養を継続するように激励を与えて、猶且つこのように1ヶ月、4ヶ月と次第に脱落していくのは現代に於いて

第1図 月別による母乳栄養の実態



## IV 団地の離乳期乳児及び幼児の食生活調査

### 1. 調査目的

団地乳幼児の食生活殊に離乳の進め方、栄養摂取量、食生活における問題点、お八つの与え方とその種類等について調査し、同程度の一般家庭の乳幼児の食生活と比較検討してみることを目的とした。

### 2. 調査対象及び調査方法

栄養に関する調査は離乳期乳児及び、幼児を対象とし昭和39年11月中旬より40年2月まで団地巡回育児

は母乳栄養を確立するということが如何に困難であるかを物語っている。1週間目の母乳栄養の率が対照例に異常に高く、団地に低いのは、多くの病院が母乳分泌開始を待たず、生後直ちに牛乳や粉乳を習慣的に与えているためにかかる差が見られるものと思われる。母の母乳選択率が対照とはほぼ同じことを考えれば、問題はむしろ助産施設の勤務者の母乳栄養の認識の不充分さにあるのではあるまいか。

## 5. 結 論

(1) 団地に於いて児に対する栄養法として母乳栄養がすぐれているという考えで母乳を選ぶ母親の数は意外に多く、76%を占めていて、対照例の76.6%と殆んど匹敵していた。

(2) 母乳を選ぶ理由は両者共「免疫、栄養上の点より」というのが多く、団地で48.4%対照例で84.5%と圧倒的多数を占めていた。

(3) 混合栄養、人工栄養を選ぶ理由の場合には両者に差が見られた。即ち団地では「栄養上の点より」としたものが46.7%、対照例では「母乳不足」のためというものが多く、48.5%であつた。

(4) 1週間目の母乳栄養の数が対照例に多く団地に少いのは団地特有のものではなく、最近の助産施設の新児の養護法を反映しているものと思われる。

(5) 第1図に見られる如く、月令の進むにつれて母乳栄養の確立がくづれていくのは、それが如何なる要因によつて起るものであるかという点については更に多くの例数を重ねて調査する必要があると思われる。

しかし、新生児期に母乳を確立することが先決であることは論をまたないところで、少なくとも、対照例の如き新生児の養護法により、新生児期の母乳栄養率を増加せしめることは確かである。

相談(母子衛生研究会主催) 教養相談(毎日新聞社主催、当研究所教養部員担当)に來所した子供の同伴者(主として母親)及び幼児教室に出席した母親を当研究所栄養部員が面接し、ききとり調査を行った。

乳児調査は離乳を始めてから1年未満のもの、幼児調査は生後1年以後5年未満のものを対象にした。

離乳期乳児を対象にした調査表は授乳栄養法、離乳開始月令、離乳上の問題点(困っている点)、離乳をしていく上に参考にしていくもの及びベビーフードの使用状況等に重点をおき、幼児を対象にした調査表は食生活に

内 藤 他 : 団地 (密集家庭) における母子保健の再検討に関する研究

における問題点とおやつに重点をおいた。このほかなお乳児、幼児とも前日に摂取した総ての食事について同伴者から聴取し記録した。

これらのコントロールには本研究所の保健指導部及び教養相談に米所した乳児と幼児で、団地に居住していないものを選んで同一時期に同一方法で調査した。

なお団地調査の対象の中に団地以外に居住しているものも若干あつたので、これらはコントロールの一部として加えた。

て加えた。

対象児の年令別、性別分布は第1、2表の通りで団地は乳児143名(男78名、女65名)、幼児108名(男44名、女64名)、コントロールは乳児83名(男49名女34名)、幼児68名(男30名、女38名)であつた。

3. 調査成績及び考察

〔A〕離乳期乳児

1) 離乳をすすめる上に参考にしてしているもの

離乳をすすめる上に参考にしてしているものは団地では対象の殆んどが巡回指導を参考にしているはずであるが、実際に巡回指導を参考にしていると答えたものは55.6%にすぎず、残りの約45%は指導をうけてもそれを参考にしていないと答えている。

また育児書を参考にしているものは62.7%にみられたが、巡回指導と育児書を併用しているのが36.6%、育児書のみによるものが10%あつた。これに対しコントロールでは78%のものが病院をあげており、又過半数のものが育児書を参考にし、育児書のみと答えたものは2%であつた。団地はコントロールにくらべ、個々についてなされた指導を参考にしているものが少なく、一般的な育児について述べられている育児書だけを参考にしているものが多いということは考えなければならない問題だ

第1表 対象児

	乳 児			幼 児			
	男	女	計	男	女	計	
団地	府前	7	6	13	3	3	6
	下 倉	15	9	24	1	3	4
	赤 田	9	4	13	2	8	10
	鶴 羽	14	11	25	16	20	36
	松 台	7	11	18	1	5	6
	柳 瀬	20	13	33			
	新 原	5	9	14	6	3	9
	東 沢	1		1	3	9	12
	緑 伏				1	1	2
	計	78	65	143	44	64	108
コントロール	49	34	83	30	38	68	
合 計	127	99	226	74	102	176	

第2表 月令別、年令別対象者

月 令	乳 児		幼 児		
	団地	コントロール	年 令	団地	コントロール
3カ月	0	1	1才	21	9
4	2	1	2	23	26
5	15	7	3	36	23
6	15	7	4	26	10
7	28	10			
8	18	14			
9	21	9	不明	2	
10	17	6			
11	12	7			
※1才以上	14	21	合計	108	68
不明	1				
合 計	143	83			

※1才をすぎたばかりの幼児で、幼児用調査用紙では無理なものに対しては、乳児用調査用紙を用いた。

第3表 離乳上参考にしているもの

回 答 者	団 地		コントロール		
	実 数	%	実 数	%	
本 人	89	62.7	46	56.2	
テレビ、ラジオ	11	7.8	9	11.0	
両親、姉妹	2	1.4	3	3.7	
知 人	11	7.8	4	4.9	
指 導 機 関	保健所	5	3.5	2	2.4
	病院	7	4.9	64	78.0
	診療所	11	7.8		
	団地巡回開業医	79	55.6		
経験 ※	21	14.8	14	17.1	
	(6)	(4.2)	(1)	(1.2)	
講 習 会	パンフレット	3	2.1		
	学校で学んだこと	6	4.2		
	特 に な し	1	0.7		
		4	2.8		

※ ( ) は経験のみで他を参考にしていないもの。

と思う。尚保健所の指導を参考にしていると答えたものは団地3.5%、コントロール2.4%にすぎなかつた。また団地では母や姉など肉親からの指導がコントロールにくらべて少い割に知人が多いことは団地生活の一面を物語るものであろう。

(2) 乳汁栄養法

1) 授乳期の栄養法

団地の乳児の乳汁栄養法はどのようになっているか、果して母乳が尊重されているかどうかは興味ある問題であるがその調査結果は第4表のようである。

団地児の授乳期における栄養法(註1参照)は混合栄養を含めて母乳を与えたものが67.1%、これに対しコントロール群は母乳、混合栄養を含めて72.3%で僅かではあるが、団地はコントロールにくらべて少なかつた。

次に東京都西部地区(住宅地区)に比較してみると都地区では49.3%が母乳であるのに対し、団地群は14.7%で1/3にも達していない。

第4表 授乳期の栄養法

種 別	団 地		コントロール		東京都西部 (住宅地)	
	実数	%	実数	%	実数	%
母 乳	21	14.7	14	16.9	1,272	49.3
混 合	75	52.4	46	55.4	712	27.6
人 工	47	32.9	23	27.7	594	23.1
計	143	100	83	100	2,578	100

註1 母乳栄養、混合栄養、人工栄養の分類に当つては乳幼児栄養研究委員会報告「東京都における乳児死亡率の栄養法による差異」の中で用いられる定義を参照した。

即ち母乳栄養：生後5か月まで全く母乳のみで哺育したもの。

人工栄養：生後2か月以内に全人工栄養となつたもの。

混合栄養：母乳、人工栄養以外のもの。

2) 離乳期における乳の与え方

離乳期における母乳栄養と混合栄養とを合せた率は5~8か月では団地で14.6%、コントロール22.2%であきらかに団地は母乳の与え方がコントロールにくらべて少い。

9~11か月でもコントロールでは尚20%が母乳を与えていたが、団地では1例即ち2%が与えられているにすぎなかつた。

(3) 離乳開始と離乳食回数の進め方

1) 離乳開始

離乳の開始は団地、コントロールとも4、5か月が最も多く70%前後がこの間に離乳を開始している。開始時の分布の巾が多少団地に広いが、これはコントロール

が1カ所で指導を受けているのに対し、団地は団地毎に指導が異なる場合が多いせいであろう。(第5表)

第5表 離乳開始月令

月 令	団 地		コントロール	
	実 数	%	実 数	%
2 カ 月	2	1.4		
3 カ 月	21	14.8	10	12.1
4 カ 月	54	38.0	54	65.0
5 カ 月	53	37.3	15	18.1
6 カ 月	11	7.8	3	3.6
7 カ 月	1	0.7	1	1.2
計	142	100	83	100

2) 離乳食回数の進め方

5か月児では団地、コントロールとも70%が1回食、残りが2回食であり変らない。6か月ではコントロールは前月と大差ないのでくらべ、団地では2回食、3回食が著しくふえ、7、8か月も同様な傾向がみられ離乳開始初期、中期における離乳のすすめ方が団地はコントロールにくらべかなり速かなことが伺われる。しかし9か月になると両群とも2回食、3回食ばかりになり、その比率もほぼ等しくなる。10、11か月になると逆にコントロールが全部3回食になつたのに比し、団地には

第6表 離乳食回数(%)

月 令	対 象 数	回 数			
		1 回	2 回	3 回	
5 月 令	団 地	15	73.3	26.7	0
	コントロール	7	71.4	28.6	0
6 月 令	団 地	15	33.3	46.7	20.0
	コントロール	7	85.7	14.3	0
7 月 令	団 地	27	11.1	74.1	14.8
	コントロール	8	25.0	75.0	0
8 月 令	団 地	16	6.2	62.5	31.3
	コントロール	14	7.1	78.6	14.3
9 月 令	団 地	20	0	45.0	55.0
	コントロール	4	0	44.4	55.6
10 月 令	団 地	17	5.9	29.4	64.7
	コントロール	6	0	0	100
11 月 令	団 地	12	0	8.3	91.7
	コントロール	4	0	0	100



まだ2回食の乳児が少数みられ、離乳の開始時期にみられたと同じ様な広い巾が完了の時期にもみられた。これも各団地によって指導者が異なるからであろうか。

(4) 1日に用いられた食品の種類数分布

次に離乳食として1日に与えられた食品の種類数は第7表に示すように5~8カ月児、9~11カ月児とも団地よりコントロールの方が多少多い傾向がみられる。これは成人即ち家族の食生活 Pattern を反映するものではないだろうか。

第7表 1日に用いられた食品の種類数分布

食品の種類数	5~8カ月児		9~11カ月児	
	団地	コントロール	団地	コントロール
	73人	36人	49人	19人
1 ~ 3	6.8	2.8		
4 ~ 6	28.8	41.7	6.1	
7 ~ 9	38.3	25.0	18.4	5.3
10 ~ 12	19.2	13.9	30.6	10.5
13 ~ 15	5.5	11.1	36.7	42.1
16 ~ 18	1.4	5.5	8.2	36.8
19以上				5.3

(5) ベビーフードの使用状況

団地では比較的手数をかけずに離乳を進める方法がとられているのではないかと考えて、離乳食製品の使用状況を調べた結果は第8表のようであった。団地、コントロールとも大体70%のものがベビーフードを使用していたが、よく使用するものは47%で団地に多く、全然使わないものは18%でコントロールに多い。

第8表 ベビーフード使用状況

	団地		コントロール	
	実数	%	実数	%
よく使う	64	47.4	29	35.4
時々使う	29	21.5	26	31.7
ほとんど使わない	23	17.0	12	14.6
全然使わない	19	14.1	15	18.3
合計	135		82	

使用するベビーフードの種類は「主食、副食とも使用する」が団地に、「副食のみ使用する」がコントロールに多い。団地ではベビーフードは積極的に取り入れている傾向にあることがうかがわれよう。(第9表)

使用している罐詰の種類は両者とも略々その傾向は一致しており、野菜罐、肉・レバー罐、肉またはレバー野菜罐が多く利用されて大体全対象者の60~40%前後になっている。

第9表 使用するベビーフードの種類

	団地		コントロール	
	実数	%	実数	%
主食、副食とも	37	54.4	17	32.7
副食のみ	27	39.7	32	61.5
主食のみ	4	5.9	3	5.8
合計	68		52	

野菜や肉類は離乳期に与えるよう指導されている食品であるが、調理に比較的手数や時間がかかり、その上出来上りがボンボンしてたべにくい場合も多いため罐詰が利用されるのであろう。

また調理しやすい卵製品の罐詰の使用率は最も低い。フレークがゆは離乳初期にのみ使用したと答えたものが大部分であった。(第10表)

第10表 ベビーフード品別使用状況

	団地%	コントロール%
果汁 罐	8.1	7.4
果物 罐	20.2	29.7
スプーン 罐	5.1	3.7
野菜 罐	42.4	48.2
野菜 マツシユ	8.1	3.7
肉・レバー 罐	53.6	63.0
肉・レバー野菜 罐	44.4	42.6
魚野菜 罐	15.2	16.7
卵黄野菜 罐	1.0	
プディング 罐	2.0	
うどん野菜 罐		5.6
フレークガユ	16.2	18.5
その他	5.1	7.4
回答数	99	54

(6) 離乳上の問題点

離乳が順調で全く問題のなかつたものが団地49.3%、コントロール37.8%で両者とも半数以上が離乳に関して何らかの問題点をもつていた。

離乳初期に関する問題点(例えば嫌がった。慣れなかつた。スプーンを嫌がった。始めたらず下痢した。等)は比較的団地に多く28.2%にみられ、これに対しコントロールは団地児の1/2以下11.8%であつた。これは離乳開始のための準備が団地側にやや不十分であつたためではなかろうか。

また食欲不振を経験した乳児も団地に多く約21%もみられたが、コントロールではその半分の12%程度であつた。その原因については母親の育児態度、子供の運

動量なども含めた更に詳細な調査研究にまたなければならぬ。

特定の食品(バター、卵)で下痢したり、湿疹(卵)ができたりするが13%前後であつた。

(7) 「前日の食事記録より」

子供によつて摂取された食事のききとり調査は非常に苦労した点であつた。それが前日のものであつても限られた時間内に話すのでは云いもれの食品が出やすいし、またたべた分量を正確に推定することも難かしい。けれども離乳食摂取の実態把握のためには欠くことのできな

い調査項目と考えられたので、経験のある研究員のみがこれに当り、調査の正確を期した。食事調査に参加した乳児は前日にいつもと変わりなく食事を摂取し、しかも摂取量のはつきりしているもののみで、5~11ヵ月児は団地112、コントロール55例であつた。この摂取食事について日本食品成分表を用いて栄養価を計算した。

1) 離乳食による栄養供給(熱量、蛋白質、脂質)  
離乳食によつてどの位の栄養が供給されるかを熱量及び蛋白質、脂質について示したのが第1図である。

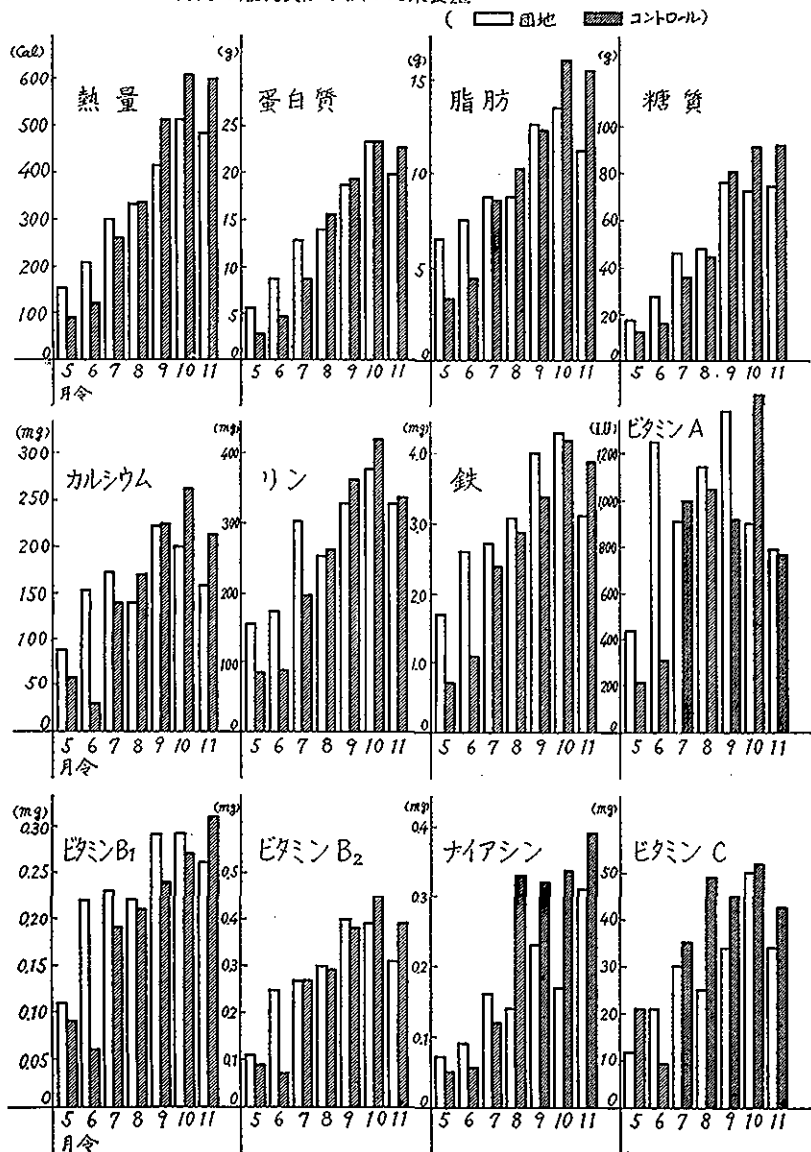
5~8ヵ月までは大体において団地に多く、9ヵ月以

降はコントロールに多い。他の栄養素についても同様な傾向がみられるが、これは離乳食回数の増加の場合と一致した傾向でコントロールは一応一本の指導で全員が大体同一歩調で離乳をすすめているが、団地群はその指導者により離乳のすすめ方の早い例やおそい例があるせいのように考察される。

2) 総摂取量と所要量の比較

母乳を与えていない乳児の処方乳と離乳食からの栄養量をみると第11、12表のようになり、団地、コントロールとも7ヵ月までは700~800cal代、それ以後11ヵ月までは800~900cal代となつているが必ずしも月令による一定の変化を示さない。

第1図 5~11ヶ月児の離乳食から摂った栄養量



第11表 5～11カ月児栄養摂取量（母乳を与えていないもの111名について）

月令	対象	人数	熱量 cal	蛋白質 g	脂肪 g	糖質 g	カルシウム mg	リン mg	鉄 mg	V・A I.U.	V.B <sub>1</sub> mg	V.B <sub>2</sub> mg	ナイアシン mg	V・C mg
5 ヵ月	団地	10	846	27.1	32.9	110.9	1,005	800	9.7	2,826	0.96	1.31	5.0	51
	コントロール	6	748	22.8	27.9	102.8	977	679	9.1	2,641	0.97	1.24	5.1	64
6 ヵ月	団地	14	773	26.4	28.9	101.8	933	698	9.3	3,288	0.93	1.24	4.5	57
	コントロール	6	785	25.0	29.0	109.8	937	684	9.5	2,758	1.00	1.20	5.2	55
7 ヵ月	団地	24	881	30.9	30.6	124.1	972	761	9.7	2,996	0.97	1.29	5.4	67
	コントロール	6	723	23.4	26.6	96.4	821	647	7.5	2,556	0.77	1.12	4.1	59
8 ヵ月	団地	15	810	30.4	28.3	107.7	833	746	8.2	2,735	0.75	1.21	4.3	51
	コントロール	11	842	32.2	30.7	109.7	912	755	8.7	2,822	0.84	1.25	6.6	81
9 ヵ月	団地	20	906	35.9	33.7	115.1	949	856	9.0	2,971	0.78	1.41	5.1	60
	コントロール	6	858	33.6	28.1	118.1	759	806	5.0	1,632	0.44	1.15	4.1	51
10 ヵ月	団地	16	910	38.6	30.7	117.3	782	823	7.9	2,091	0.67	1.18	5.5	67
	コントロール	5	949	36.3	30.5	123.0	701	793	5.9	2,198	0.47	1.06	5.0	63
11 ヵ月	団地	12	875	34.3	28.7	110.6	763	774	6.9	2,039	0.61	1.11	5.3	54
	コントロール	4	845	32.9	27.0	117.8	572	647	4.8	1,230	0.46	0.93	4.5	46

第12表 体重1kg当摂取栄養量

(人工  
栄養児)

月令	対象	人数	平均体重 g	熱量	蛋白質	脂肪	動蛋
				cal	g	g	g
5 ヵ月	団地	7	7,940	107	3.5	4.1	3.1
	コントロール	6	8,620	87	2.6	2.9	2.5
6 ヵ月	団地	9	7,990	100	3.6	3.8	3.0
	コントロール	6	8,250	96	3.1	3.6	2.9
7 ヵ月	団地	17	8,880	98	3.3	3.5	2.7
	コントロール	6	7,580	96	3.1	3.6	2.8
8 ヵ月	団地	7	8,350	102	3.8	3.6	3.0
	コントロール	10	8,590	97	3.8	3.5	3.0
9 ヵ月	団地	15	9,230	100	4.0	3.7	3.2
	コントロール	6	8,730	99	3.8	3.2	2.9
10 ヵ月	団地	13	9,550	95	4.0	3.3	3.1
	コントロール	5	9,240	101	4.0	3.5	2.7
11 ヵ月	団地	7	10,260	83	3.4	2.7	2.5
	コントロール	4	8,960	95	3.7	4.0	2.6

熱量及び蛋白質について総摂取量と所要量とを比較すると第2図のようで、団地の5、7ヵ月児、コントロール11ヵ月児を除いて両者とも所要量を下廻っている。

蛋白質も略々同様の傾向を示している。

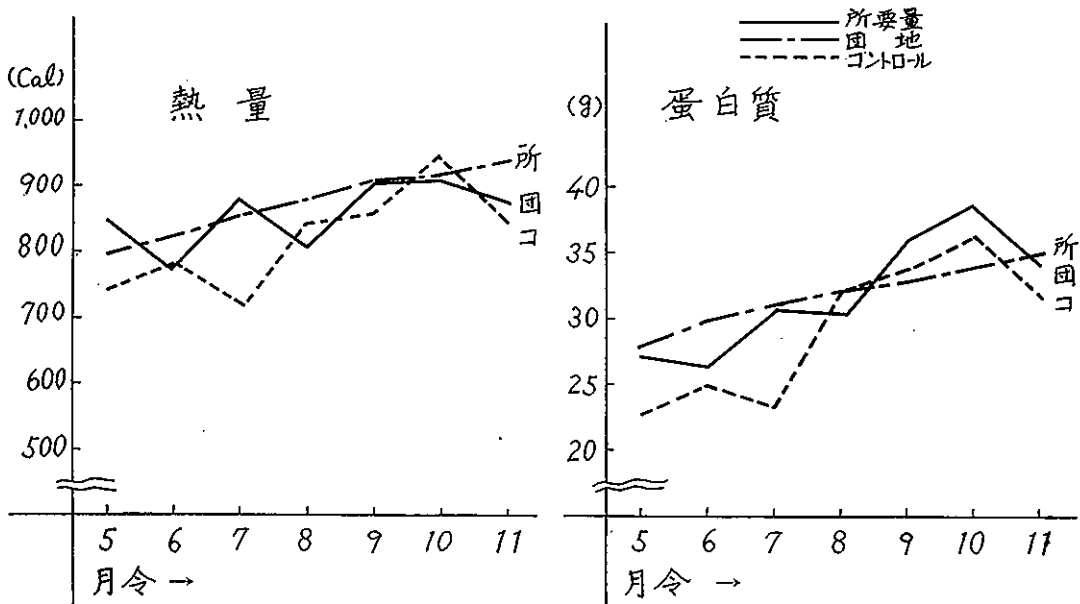
### 3) 総摂取量に対する離乳食の比率

母乳を与えていない乳児について、総摂取量に対する離乳食の比率をみると第13表及び第3図のようで、ここにおいても又前述と同じ様な傾向がみられ、団地群はコントロールに比較して、離乳前半では離乳食比率が高く、後半になると逆に低くなる。これら一連の傾向は指導者による指導法の違いばかりでなく、団地の環境的影響も考える必要があるかも知れない。（気持がやや不安定で刺激には過敏であるが、長続きしない等。）この点に関して更に検討の必要があるように思う。

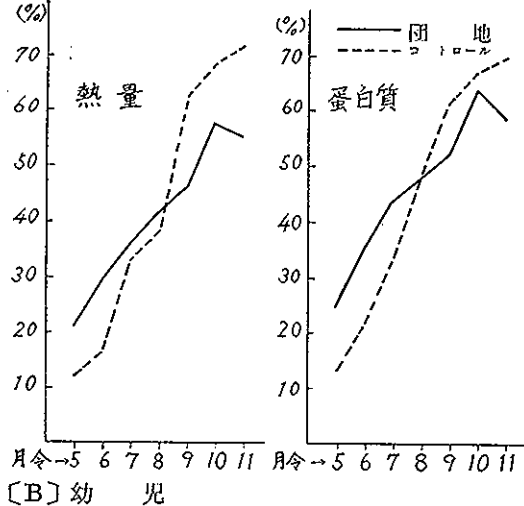
第13表 母乳を与えていない乳児の総摂取栄養量に対する離乳食の割合(%)

月令	対象	熱量	蛋白質	脂肪	糖質	カルシウム	リン	鉄	V・A	V・B <sub>1</sub>	V・B <sub>2</sub>	ナイアシン	V・C	
5 ヵ月	団地	10人	21.5	25.0	25.0	18.4	9.9	23.7	21.0	19.4	12.5	11.7	15.6	19.5
	コントロール	6	12.6	13.2	11.8	13.3	6.2	12.3	7.2	7.5	8.9	7.7	9.5	28.1
6 ヵ月	団地	14	29.8	35.9	28.2	29.0	17.6	26.7	29.6	40.7	25.2	21.2	22.0	37.3
	コントロール	6	16.9	21.6	16.6	15.5	3.3	13.9	12.2	12.4	6.7	6.0	13.1	17.4
7 ヵ月	団地	24	36.1	43.8	30.4	39.0	18.9	42.0	30.3	32.5	25.2	22.6	30.4	44.5
	コントロール	6	33.6	33.1	29.8	34.8	17.1	28.2	24.6	37.5	21.9	22.4	25.9	50.0
8 ヵ月	団地	15	41.8	47.8	31.6	45.6	17.5	34.8	38.5	42.5	30.8	25.4	34.5	48.2
	コントロール	11	38.3	48.0	33.5	38.8	19.0	32.7	32.7	37.2	25.4	23.6	51.0	61.7
9 ヵ月	団地	20	46.2	52.5	37.7	66.5	23.4	38.6	45.1	46.7	36.7	28.1	42.3	56.9
	コントロール	6	62.8	61.4	46.0	71.8	36.8	49.9	72.9	59.9	56.4	39.8	78.0	89.5
10 ヵ月	団地	16	57.6	64.0	46.2	61.1	26.8	48.0	56.6	44.8	44.4	34.5	64.4	74.0
	コントロール	5	68.6	67.2	54.5	81.0	36.6	53.4	75.0	70.5	60.0	40.7	81.4	90.2
11 ヵ月	団地	12	55.6	58.3	39.3	68.0	20.9	42.5	44.8	38.0	41.6	27.5	58.8	63.7
	コントロール	4	71.3	69.7	57.5	78.5	37.0	52.3	81.6	62.8	68.4	43.5	86.8	93.5

第2図 総摂取量と所要量の比較



第3図 人工栄養児の摂取栄養量に対する離乳食の割合%



[B] 幼児

(1) 対象幼児によつてとられた食事の栄養的検討

団地幼児の食事を栄養的見地から評価するため、調査前日に摂取された食事の献立について次の点から検討した。即ち食品を栄養的見地から下記の様にA、B、C、Dの4群にわけて1回の離乳食にこの4種が組合さつた場合を一応質的に栄養が整つたものとし、この中で何れか1つ、或いはそれ以上欠く食事を不完全食事とした。

- A 穀類、芋類等の熱量源
- B 乳、卵、肉、豆等の蛋白質源
- C 野菜、果実等のビタミン、無機質源
- D 油脂類の熱量源

第14表 食餌の組合せ

		団地			コントロール		
		人数計	実数	%	人数計	実数	%
朝食	1 種類	114	6	5.3	87	0	0
	2 //		17	14.9		6	6.9
	3 //		54	47.4		49	56.3
	4 //		37	32.4		32	36.8
昼食	1 //	109	6	5.5	88	3	3.4
	2 //		13	11.9		10	11.4
	3 //		42	38.6		39	44.3
	4 //		48	44.0		36	40.9
夕食	1 //	113	1	0.9	88	0	0
	2 //		11	9.7		7	9.1
	3 //		43	38.1		36	40.9
	4 //		58	51.3		44	50.0

表に示すように昼食、夕食には団地、コントロールの両者の間に殆んど差をみないが、団地では朝食に1品又

は2品組合せの著しく不完全な食事が比較的多く、全体の20%に達している。

1食中蛋白質を全くとらなかったものは第15表のように両者とも昼食において最も多く10%を占めており、次いで朝食に多い。また蛋白質をとっている者の中、動物性蛋白質が含まれていない食事でも昼食に多かつた。コントロールとの間に特別な差異はみられなかつた。

(第16表)

第15表 蛋白質なしの食餌(1日)

	団地			コントロール		
	人数計	実数	%	人数計	実数	%
朝食	人中114	7	6.1	人中88	5	5.7
昼食	109	11	10.1	88	9	10.2
夕食	113	2	1.8	88	2	2.3

第16表 蛋白質をとっている者のうちで動物性蛋白質なしの食餌(1日)

	団地			コントロール		
	人数計	実数	%	人数計	実数	%
朝食	人中107	8	7.5	人中83	6	7.2
昼食	98	12	12.2	79	14	17.7
夕食	111	4	3.6	86	4	4.7

発育期にある乳幼児期は特に毎回動物性蛋白質を与えることが望ましいので更に改善の必要があると考えられる。

第17表 野菜、果実なしの食餌(1日)

	団地			コントロール		
	人数計	実数	%	人数計	実数	%
朝食	人中114	35	30.7	人中88	19	21.6
昼食	109	25	22.9	88	20	22.7
夕食	113	9	8.0	88	9	10.2

食事中野菜及び果実を全くとらなかつた例は第17表のように団地の朝食に約30%、団地の昼食及びコントロールの朝及び昼食に20%余が数えられた。夕食には野菜も果実もつかない食事は少く、8~10%程度であつた。

(2) 牛乳の使用について

牛乳は両群とも約90%のものが使用していた。この中団地は約70%が1~2本使用しており、コントロールでは2本を中心にして1~3本の間に分布が多かつ

た。(第18、19表)

第18表 牛乳の使用の有無

	団地		コントロール	
	実数	%	実数	%
使用していた	104	90.4	78	88.6
使用していなかった	11	9.6	10	11.4
合計	115	100.0	88	100.0

第19表 牛乳の使用本数 (1日)

	団地		コントロール	
	実数	%	実数	%
1/2 本	1	2.1	1	2.7
1 本	15	31.9	7	18.9
1 1/2 本	4	8.5	3	8.1
2 本	15	31.9	13	35.2
2 1/2 本	3	6.4	6	16.2
3 本	7	14.9	7	18.9
4 本	2	4.3		
合計	47	100.0	37	100.0

(3) 卵の使用について

1日のうち卵を全く使用しなかったのは団地18%、コントロールも略同程度であった。

卵を用いるのも朝食に最も多く約70%のものが朝食に用いていたが、夕食にもかなりの使用がみとめられた。(第20表)

第20表 卵を3食のうちいつ使用したか

	団地		コントロール	
	実数	%	実数	%
朝食	59	64.8	54	74.0
昼食	30	32.9	18	24.7
夕食	24	26.4	19	26.0
使用した人数計	91人		73人	

(4) 食生活上の問題点

食生活の上で何も心配なく順調であると答えたものは団地、コントロールとも1/5で僅かに団地が多い。“何らかの問題点をもっている”のうちで最も多いのは“好き嫌いがある”で共に約半数にみられ、団地では野菜、魚、肉、牛乳、コントロールでは野菜、魚が多く嫌われていた。“食欲がない”“食事量が少い”は団地に多く

みられたが、それに“食欲がない時があつた”を加えるとコントロール26.8%に対し団地では42.3%となつた。

これは離乳期乳児の場合も同様で団地はコントロールにくらべて1.5倍のものが食欲不振を訴えている。しかしこの訴えが本当に団地の子供のたべ方の少いことを意味するか、或いは団地の母親の育児意識過剰によるものか現在の資料では明かにならない。(第21表)

第21表 食生活上の問題点

	団地		コントロール	
	実数	%	実数	%
回答数	109人		70人	
順調、問題点なし	24	22.0	14	20.0
問題点を 持つ	食欲がない、食事量が少い	33 38.8	14 25.0	
	食欲がない時があつた	3 3.5	1 1.8	
	好き嫌いがある	39 45.9	27 48.2	
	むらがある	21 24.7	13 23.2	
	おやつをいつも欲しがる	11 12.9	9 16.1	
	買いぐいをしたがる	3 3.5	7 12.5	
	遊び食べする	14 16.5	11 19.6	
	食事に時間がかかる	2 2.3	1 1.8	
	湿疹や下痢をしやすい	3 3.5	1 1.8	
	近所、使用人がいつも菓子を与えるので困る	1 1.2	2 3.6	
その他	9	5		
合計	85	78.0	56	80.0

(5) おやつについて

1) おやつとの与え方と回数

第22表 おやつ供与の有無

	団地		コントロール	
	実数	%	実数	%
毎日与える	104	96.3	64	94.3
時々与える	4	3.7	3	4.2
ほとんど与えない			1	1.5
回答数	108		68	

第22表に示すように殆んど全ての家庭が毎日おやつを与えている。毎日与えている場合、時間を決めているのは第23表のように団地、コントロールとも60%前後であるが、わずかにコントロールに多くみられる。先に厚生省

第23表 おやつとの与え方

	団地		コントロール	
	実数	%	実数	%
時間をきめて	60	57.8	41	65.0
不規則に	44	42.2	22	35.0
回答数	104		63	

が行った4～5才児のおやつ調査では団地64.3%、都市一般地区34.6%が時間を決めて与えており、団地の場合、今回はそれよりわずかに少い。

おやつを与える回数は団地、コントロールとも2回が最も多く、約半数を占め、団地85.1%、コントロール90.9%が1日のうち1回から2～3回与えている。

間食が1日3回以上のものはコントロールに多いが、一方団地にみられる不明9%の中に「ひつきりなしにたべている」とか、「勝手に自分でたべている」とかおやつとり方が放任されている家庭が含まれているのは注目すべきであろう。（第24表）

第24表 おやつを与える回数（1日）

	団地		コントロール	
	実数	%	実数	%
1回	26	24.3	22	33.3
1～2回	8	7.5	3	4.6
2回	49	45.8	31	47.0
2～3回	8	7.5	4	6.1
3回	4	3.7	2	3.0
3～4回	2	1.9	2	3.0
4回以上			2	3.0
※不明	10	9.3		
合計	107		66	

※・ひつきりなし

- ・勝手に自分で出して食べる
- ・保育園にいつているのでわからない など

2) 与えるおやつの種類

与えるおやつの種類を手作りのものと市販品とに分けて調査した。団地では71.4%のものが手作りのものを与えており、コントロールでは67.6%。この中、週に2～3回以上作るのは団地42.3%、コントロール37.5%で、自家製のおやつを与えているもの及びそれを作る回数は団地にわずが多い。（第25表）

第25表 家庭でおやつを作る回数（1週間当）

	団地		コントロール	
	実数	%	実数	%
1回	15	19.2	9	18.7
1～2回	9	11.6	8	16.7
2回	15	19.2	10	20.8
2～3回	11	14.1	5	10.4
3回	7	9.0	3	6.2
3～4回	3	3.8	2	4.2
4回以上	12	15.4	8	16.7
稀に時々	6	7.7	3	6.3
回答数	78		48	

手作りのおやつの種類は両群ともブディング、及びホットケーキが圧倒的に多く、70%前後のものがこれをあげている。

これはインスタント製品があつて簡単にでき、しかも子供が喜んでたべるからであろう。

次いで両者ともゼリー、ドーナツ、いも類や果物を用いたおやつを多く作っている。（第26表）

第26表 手作りのおやつの種類

	団地		コントロール	
	実数	%	実数	%
回答数	80		48	
ブディング	58	72.5	31	64.6
ホットケーキ	54	67.5	33	68.8
ゼリー	15	18.8	14	29.2
ドーナツ	7	8.8	3	6.3
果物加工 (煮る、ジュースにするなど)	7	8.8	3	6.3
いも類 (大学いも、蒸しいもなど)	6	7.5	4	8.3
パンを使つて	3	3.8	2	4.2
おやき	4	5.0		
クッキー・ビスケット	3	3.8	2	4.2
※その他	8	10.0	8	16.6

※団地…ケーキ、カステラ、インスタントラーメン、グラタン、アイスクリーム、蒸しパンなど  
 コント…プラマンデー、汁粉、あべ川ロール、パバロア、ケーキ、アイスクリームなど

牛乳、果物及び市販の菓子の種類とその使用回数は第27表のようで団地、コントロール両者とも果物と牛乳の頻度が高く、70～90%のものはおやつの中にこれらを

あげている。

菓子類としては、チョコレート、クッキーまたはビスケット、せんべいなどが多く50～60%程度与えている。両者間で差異がみられるのは、果物、アメ類、せんべいでコントロールに多い。なお10%のものがガムを与えていた。(第27表)

第27表 牛乳、果物及び市販の菓子の種類とその使用回数  
 回答者 (団地 112, コントロール 70)

	団 地		コントロール	
	実数	%	実数	%
○牛 乳	80	71.5	55	78.5
○果 物	84	75.0	62	88.9
○市販の菓子 アメ類 (ドロップも含む)	41	35.7	34	48.5
チョコレート	60	53.6	39	55.8
クッキー	56	50.0	38	54.3
ビスケット	54	48.3	44	63.0
せんべい	12	10.7	7	10.0
ガム	7	6.3	4	5.7
パ ン 類	3	2.7	2	2.9
カステラ	3	2.7	2	2.9
ケーキ	2	1.8	3	4.3
ヨーグルト	2	1.8	2	2.9
ジュース	2	1.8	2	2.9
クラッカー	2	1.8	2	2.9
※その他	4	3.6	8	11.4

※団地 …チーズ、アイスクリーム、ピーナツ、コンフレックス  
 コント…甘栗、エルビー、アイスクリーム、そば、ロール  
 ピーナツ、ゴーフル、サイダー、カルピス

おやつのに現金を与えているのは団地で8.0%、コントロール15.5%にみられた。先の問題点ではコントロールは「買いぐいをしたがる。」が多くみられたが、現金をおやつのに与えているのも団地に比べて多い。1回に与える金額は10円程度が多く、20円、30円というも僅かにみられた。

与えたお金で子供はガム、キャラメルなどを買い、また現金を与える理由は子供がほしががるから、訓練のため等であつた。

3) 子供のほしががるおやつ

「子供はどんなおやつをほしががるか、」の問いに対し団地30.2%、コントロール15.5%は特にほしがらないと答えている。欲しががる子供では(第28表)チョコレートが4.5%前後あり、ガムもまた多い。次いでアメ類、

せんべい、果物となつている。

第28表 子供のほしががるおやつの種類とその頻度 (回答者 団地78, コントロール60)

	団 地		コントロール	
	実数	%	実数	%
チョコレート	35	45.0	26	43.3
ガム	30	38.5	23	38.4
アメ類 (キャラメルも含む) (ドロップも含む)	15	19.2	18	30.1
せんべい	7	9.0	11	18.4
果 物	8	10.3	6	10.0
パイ・ケーキ	2	2.6	4	6.7
ビスケット	1	1.3	3	5.0
パ ン 類	5	6.4	2	3.3
ブディング	1	1.3	5	8.3
そ の 他	クラッカー、アイスクリーム、サイダー、シール、甘いもの、シスコ、煎茶、スルメ、まんじゅう、ラーメン、広告、友達とおまけの		ドーナツ、クラッカー、ピーナツ、甘栗、アイスクリーム、鉄人、カルピス、焼いもの、甘いものなど	

子供がどうして、そのおやつをほしががるようになったかを問い、第29表の結果を得た。テレビ、ラジオの影響が第1位で特に団地では4.1%を占めていた。これはコントロールの2.7%を遙かに上廻っていたが、一方家族の影響の項ではコントロールが1.8%に対し団地9%にしかすぎない。これだけで推論するのは早計であるが、恐らく団地の子供はテレビを見る時間が長く、また家族揃つて食事やおやつをたべる等一家団らの時が少いので

第29表 特定のおやつを欲しががる理由

	団 地		コントロール	
	実数	%	実数	%
テレビ・ラジオの影響	32	41.0	16	26.7
おまけつきのため	14	18.0	13	21.6
近所の子供の真似をする	12	15.4	11	18.4
家族の影響	7	9.0	11	18.4
特に理由なし	21	27.0	5	8.3
その他(好見できれい)など	8	10.2	11	18.4

回答数 { 団地 78, コントロール 60 }



はなかりうか。夕食時刻の調査では父親が夕食は家庭でたべないとか、帰宅がおそいので揃ってたべられない、というのが団地に圧倒的に多かつたことを考え合せ、更に調査を重ねる必要があるように考えられる。

この他おまけつきだから18%で、これはガムに多くみられ、また近所の子供の真似をするのが15%あつた。

4)「近所の子供が遊びに来ておやつをほしがるか(a)」「おやつについて近所と打合せをしているか(b)」について

a「近所の子供が遊びに来ておやつをねだらないか、」の間に對し「友達がない」という答が団地4%、コントロール23%にあつた。また、「遊びに来ない」が団地7%、コントロール4%程度あり、遊びに来る子供の中、約半数はほしがり、そしておやつをねだられたら85%程度のものが与えている。これは団地、コントロールとも大体同様であつた。

b「おやつについて近所と打合せをしているか」については団地では約22%のものがしていた。その内容を

みると、「与えないことにしている」が14%、「時間を考慮し」「種類を決めている」というのが約半数であつた。この他「グループで交代で与えている」とか、「親に聞いてから与える」「与えたら報告する」等もあつた。これに對しコントロールでは「打合せをしている」は団地の1/2の11%にすぎなかつた。

団地の場合、コントロールにくらべて友達がいないというのが非常に少なく、また家庭へ遊びにはなくても団地の遊園地で子供同志で遊ぶ場合が多く、その点恵まれているといえよう。

また、おやつについての打合せを近所同志でしているものは団地に多かつたが、折角家庭では規則的におやつを与えようとしても、近所の方々の善意ある誤り等によつて乱される場合が多いので、更に親や近所同志での打合せが望まれる。グループで交代で与えるとか、特に交代で手作りのものを与える等団地の特色を発揮させたいものである。

註1 参考文献 東京都乳幼児集団検診成績(昭和35年東京都衛生局)

## V 団地内での乳幼児の事故

### 1. 調査目的

団地のどんなところで、どんな事故が乳幼児の間で最も多いと母親達が考えているかをするとともに、実際に、どんなかたちの事故がどのくらい起つているかをすることは、団地内での不慮の事故を防止するため、甚だ重要なことである。また更に、事故に対する母親の認識と、事故の実態とのずれをすることは、団地内の事故防止の対策の上から必要と考える。そこで吾々は、先ず、団地に住む母親が団地の中で、どのようなかたちの事故が、乳幼児の間に最も多いと考えているかを、面接によつて調査し、併せて実際に団地の中でみられた乳幼児の事故について分析した。

### 2. 母親の認識調査

#### (1) 調査方法並びに対象

団地内に居住し、乳幼児を持つ母親に直面して、附表2(27頁)のような諸項目の質問を發して、その内容を集計した。対象となつた母親は、新所沢(27名)豊四季(38名)両団地で、愛育研究所が行つた幼児知能テストに幼児とともに参加した母親と、府中(14名)前原(21名)両団地で母子衛生研究会が主催した乳幼児健康相談に幼児とともに参加した母親で、総計100名である。

#### (2) 調査結果並びに考察

1 「団地内では、団地の外の生活に比べて乳幼児の事故が多いと思うか、少ないと思うか」という質問に對しては、第1表のように「他に比べて少ないと思う」と答えた者が83%で断然多く、「多いと思う」「団地も他も変わらない」が夫々7%であつた。

2 「その理由は何か」という質問に對しては、団地内での事故が他の地域に比べて少ないのは、第2表に示すように、「適当な遊び場があるため」と考えている人が45.8%で最も多く、他に「車が少ないため」(21.7%)「危険なところが少ないため」(9.6%)「歩道があるため」(3.6%)などがあげられていた。

一方団地は他よりも事故が多いと答えたのは7名であるが、その理由として、「階段が多い」「階段が急である」「等階段があるため甚だ危険とする者が5名で他の2名は「焼却炉のような危険な場所がある」ことを指摘しているが、この2名は何れも豊四季団地の居住者であつた。

団地の内も外も事故の頻度は変わらないと答えた者は7名であつたが、それらは「子どもが勝手に団地の外に出てゆくから」「団地にも自動車が入ってくるから」或いは「団地内に最近自動車が急に多くなつたから」等の理由から内も外も変りがないと述べている。

3 「団地で事故のおこりやすい場所はどこと思うか」という問に對しては、(第3表)建物の中が68%で

第1表 団地内の事故が他地域より多いと思うか否かに就いての母親の意見

	府 中		新 所 沢		豊 四 季		前 原		計	
少 ない	11	78.5%	23	85.2%	30	78.9%	19	90.4%	83	83.0%
多 多い	2	14.3	2	7.4	2	5.3	1	4.8	7	7.0
変 ら ない	0		1	3.7	5	13.2	1	4.8	7	7.0
わ か ら ない	1	7.2	1	3.7	1	2.6	0		3	3.0
無 答	0		0		0		0		0	
計	14	100.0	23	100.0	38	100.0	21	100.0	100	100.0

第2表 団地内の事故が少ない理由

	府 中		新 所 沢		豊 四 季		前 原		計	
遊 び 場 が ある	7	63.6%	8	34.8%	14	46.7%	9	47.3%	38	45.8%
車 が 少 ない	0		8	34.8	8	26.7	2	10.5	18	21.7
速 度 が ゆ る い										
危 け ん な 所 が 少 ない	1	9.1	2	8.7	1	3.3	4	21.1	8	9.6
歩 道 が ある	0		2	8.7	0		1	5.3	3	3.6
わ か ら ない	3	27.3	3	13.0	7	23.3	3	15.8	16	19.3
計	11	100.0	23	100.0	30	100.0	19	100.0	83	100.0

第3表 団地内での事故の多い場所がどこかについての母親の意見

		府 中		新 所 沢		豊 四 季		前 原		計		
建 物 の 中	玄 関	1	7.1%	1	3.7%	2	5.3%	4	19.0%	8	8.0%	
	居 間	2	14.3	4	14.8	7	14.4	1	4.8	14	14.0	
	台 所	1	7.1	0		2	5.3	0		3	3.0	
	風 呂 場	0		2	7.4	0		0		2	2.0	
	バルコニー	2	14.3	0		0		3	14.3	5	5.0	
	階 段	4	28.6	15	55.6	14	36.7	3	14.3	36	36.0	
小 計	10	71.4	22	81.5	25	65.7	11	52.4	68	68.0		
建 物 の 外	道 路	3	21.5	1	3.7	3	7.9	4	19.0	11	11.0	
	児 童 園	0		4	14.8	8	21.1	3	14.3	15	15.0	
	広 場	遊 具 場	0		3	11.1	6	15.8	1	4.8	10	10.0
		砂 場	0		0		2	5.3	2	9.5	4	4.0
	団 地 の 周 辺	0		1	3.7	0		0		1	1.0	
	小 計	0		0		0		2	9.5	2	2.0	
小 計	3	21.5	5	18.5	11	29.0	9	42.8	28	28.0		
わ か ら ない	1	7.1	0		2	5.3	1	4.8	4	4.0		
計	14	100.0	27	100.0	38	100.0	21	100.0	100	100.0		

圧倒的に多く、その中では、階段を指摘した者が過半数を占めている。次いで居間、玄関、バルコニーがあげられる。しかし前原団地に於ては階段が比較的少なく、玄関が多くなっている。

建物の外では、児童園で事故が多発するという者が最も多く、児童園の広場での事故が多いという答は特に豊四季団地に多い。次に道路があげられているが、府中、及び前原団地に道路を指摘した者が多い。また前原団地

では、〃団地の周辺で事故が多発する〃という答もみられた。

4 「建具や部屋の構造について危ないと思うものがあるか」という質問には、ある(50%)ない(50%)全く半々であったが、前原、府中両団地では〃危険なものがある〃という者が高率で、新所沢団地はほぼ同数であり、豊四季団地では〃危険なものがある〃と答えた者は34.2%で、他の団地に比べて低率であった。

第4表 団地の建物、建具等で危ないと思うものがあるかどうか

	府 中	新 所 沢	豊 四 季	前 原	計
あ る	9 64.3%	14 51.9%	13 34.2%	14 66.7%	50 50.0%
な い	5 35.7	13 45.1	25 65.8	7 33.3	50 50.0
其 の 他	0	0	0	0	0
計	14 100.0	27 100.0	38 100.0	21 100.0	100 100.0

5 問4で危険なものがあると答えた人に「具体的にどんなものが危ないと考えているか」尋ねてみたところ、玄関の重い扉に手をはさむおそれが多い(22%)が最も多く、コンクリートが多い(20%)、階段の位置や

構造(14%)部屋が狭い(14%)等が危険な理由として多く挙げられた。その他に窓のさくが低い(8%)ベランダが危ない(6%)床がすべり易い(4%)、洗面所が高すぎる(4%)等があげられていた。(第5表)

第5表 建物の構造などで危険と思われるもの

	府 中	新 所 沢	豊 四 季	前 原	計
階段の位置・構造	0 %	3 21.4%	0 %	4 28.6%	7 14.0%
コンクリートが多い	2 22.2	0	4 30.8	4 28.6	10 20.0
玄関のドア	2 22.2	1 7.1	3 23.0	5 35.7	11 22.0
床がすべりやすい	0	2 14.3	0	0	2 4.0
窓のさくが低い	0	0	4 30.8	0	4 8.0
洗面所が高い	1 11.2	0	1 7.7	0	2 4.0
ベランダ	2 22.2	0	1 7.7	0	3 6.0
部屋が狭い	2 22.2	5 35.8	0	0	7 14.0
わからない	0	3 21.4	0	1 7.1	4 8.0
計	9 100.0	14 100.0	13 100.0	14 100.0	50 100.0

以上の中で玄関のドアはどの団地でも挙げられていたが、前原団地では35.7%と高率であった。これは、丁度今回の調査を行う数週前に同団地に住む一人の幼児が玄関の重い鉄の扉に手をはさまれて骨折した事故があったばかりのところ、丁度母親の注意がそれにむけられていたところなので、甚だ高率を占めたものと思われ、先に事故のおこりやすい場所として同団地で〃玄関〃と答えた母親が多かったのも同じ理由によると考えられる。階段が危ないという意見は、前原、新所沢両団地にはあるが、府中、豊四季両団地には1名もなく、窓のさくが低いから危険という意見は豊四季団地だけ、部屋が

狭まくて危ないという訴えは新所沢団地に多い等、団地によつて危険と思われるものが異つているのは、居住年数の差等からくるものより、こうした団地内でおこつた事故からうける母親の印象のちがいによるためと思われる。

6 「道路や児童園に危険なものがあると思うか」については(第6表)、ない(53%)がやや多く、〃あると思う〃は45%であった。

7 「児童園や道路で危険と思うものについて具体的に」という問に対しては第7表のように、道路を指摘しているものが16名(35.5%)もいるが、その中で道路

第6表 児童園や道路に危険なものがあると思うか

	府 中		新 所 沢		豊 四 季		前 原		計	
あ る と 思 う	6	42.9%	14	51.9%	18	47.4%	7	33.3%	45	45.0%
あ る と 思 わ な い	8	57.1	13	48.1	19	50.0	13	61.9	53	53.0
わ か ら な い	0		0		1	2.6	1	4.8	2	2.0
計	14	100.0	27	100.0	38	50.0	21	100.0	100	100.0

第7表 児童園や道路で危険と思われるものは

	府 中		新 所 沢		豊 四 季		前 原		計	
ブ ラ ン コ	2	33.3%	0	%	10	55.6%	0	%	12	26.7%
ガ ラ ス 片 が 多 い	3	50.0	3	21.4	2	11.1	2	28.6	10	22.2
そ の 他	0		0		2	11.1	1	14.2	3	6.7
道 路 が 狭 い	0		2	14.3	2	11.1	2	28.6	6	13.3
道 路 が 広 い	1	16.7	7	50.0	2	11.1	0		10	22.2
わ か ら な い	0		2	14.3	0		2	28.6	4	8.9
計	6	100.0	14	100.0	18	100.0	7	100.0	45	100.0

が広いので危険と考えているものが10名、逆に道路が狭くて危険であると考えている者が6名と、同じ道路に危険を感じながら、広いためと狭いためというように正反対の見方をしている母親のいることは興味深かった。尚道路が広いため危いと考えている母親は新所沢団地に多く、前原団地では狭くて危険という答はあつたが、広くて危ないという意見はなかつた。

ブランコが危いという意見の中では、背を支えるものがないとか、ブランコの周囲の柵が狭すぎて危険という意見が3件、何れも豊四季団地できかれたが、下が石なので危ないと思うという意見が9名からきかれ、しかも、そのうち7名は豊四季団地の母親の意見で、豊四季団地だけでブランコに関する意見が10名あり、同団地で児童園、道路に危険なものがあると答えた母親の55.6

%がブランコを挙げている。このことは同団地のブランコの構造、管理状態の検討の必要性を示唆している。

どの団地にもガラスの破片が多いと、管理の不ゆきとどきを指摘している意見が22.2%みられた。その他、児童園に多勢の子どもが集つてくるために、他の子どもにいちめられたり、石をぶつけられたりして危いとか、子どもの集団行動が危険、あるいは多勢集つて流行の遊びが危険のものになるなど、友達あそびの多い団地での母親らしい心配も挙げられていて甚だ興味深いものがあつた。

8. 「どのようにしておこる事故が団地内では多いと思うか」については、第8表のように、ころぶが50%と圧倒的に多く、幼児をもつ母親の意見として、全く当を得たものと思われる。次は落ちる(21%)、ぶつか

第8表 団地内の乳幼児の事故で多いと思う動機

	府 中		新 所 沢		豊 四 季		前 原		計	
落 ち る	4	28.6%	8	29.6%	5	13.2%	4	19.0%	21	21.0%
こ ろ ぶ	5	35.8	12	44.5	23	60.5	10	47.6	50	50.0
打 つ	1	7.1	2	7.4	2	5.3	2	9.5	7	7.0
ぶ つ か る	1	7.1	1	3.7	5	13.2	3	14.3	10	10.0
切 る	0		2	7.4	0		0		2	2.0
さ す	0		0		1	2.5	1	4.8	2	2.0
は さ む	0		1	3.7	0		1	4.8	2	2.0
わ か ら な い	3	21.4	1	3.7	2	5.3	0		6	6.0
計	14	100.0	27	100.0	38	100.0	21	100.0	100	100.0

る（10％）で、打つ（7％）がこれについているが、ガラス片などによる事故が多いと考えている割には、切る、さす、という事故は2％と比較的少数意見にすぎなかつた。はさむも2％にすぎず、ドアの事故のあつた前原団地でもはさむは1名だけで、落ちるが圧倒的に多かつた。先に階段の位置や構造について危険と思うという意見の皆無であつた豊四季団地では、落ちる事故が多いという意見は13.2％にすぎず、ころぶが60.5％と極めて高率を占めていた。

9 「団地内で子どもの事故を少なくするためには、

次の団地のどこに最も期待がもてるか」という問とともに、①日本住宅公団、②保健所、③交番並びに警察、④市町村役場、⑤医師会、⑥団地周辺の学校、幼稚園、保育園の先生、⑦団地周辺の学校、幼稚園、保育園等のPTA、⑧自治会、⑨その他、を例挙げたところ、日本住宅公団が44％で最も期待されるところで、団地の自治会が31％でこれについていた。他に交番及び警察が6％、保健所2％、役場1％が挙げられていたが、全くども期待できないという意見がどの団地にもあつて11％を占めていた。（第9表）

第9表 団地内の乳幼児の事故防止の上で最も期待される団体

	府 中		新 所 沢		豊 四 季		前 原		計	
日本住宅公団	5	35.7%	12	44.5%	22	57.9%	5	23.8%	44	44.0%
保健所	1	7.1	0	14.8	1	2.6	0		2	2.0
交番及警察	0		4		2	5.3	0		6	6.1
市町村役場	0		0		1	2.6	0		1	1.0
医師会	0		0		0		0		0	
周辺の学校・幼稚園・保育園の先生	0		0		0		0		0	
同上PTA	0		0		0		0		0	
自治会	6	42.9	7	25.9	10	26.3	8	38.1	31	31.0
全くども期待できない	2	14.3	4	14.8	2	5.3	3	14.3	11	11.0
わからない	0		0		0		5	23.8	5	5.0
計	14	100.0	27	100.0	38	100.0	21	100.0	100	100.0

以上のように事故に対する母親の意見は団地別に多少の特色がみられたが、回答者の居住階数、居住年数、子どもの年令、子どもの数、父親の年令、職業別には殆んど差がみられなかつた。ただ回答者の年令、即ち母親の年令別では、団地別ほどではないが、多少のちがいが認められる。例えば問7の「児童園で危ないと思うものは何か」に関して、ガラス片が危ないと思つたのは何れも30代の母親で、20代の母親でガラス片を指摘したものは皆無であつた。また問5の建物の構造で危険と思われるものについての意見では、階段を危険と思つたのは比較的若い母親に多く、窓のさくが低い、洗面所が高い、床がすべりやすい等の意見は総て30代の母親からでた意見であつた。

(3) 小 括

乳幼児の事故に関して、団地に住む母親の意見をまとめてみると、団地内には適当な遊び場所があるために、団地の外に比べて乳幼児の事故が少ないという意見が極めて多い。

団地における乳幼児の事故は、建物の中が多くて、し

かも階段でおこりやすい。

団地の建物の構造の上では、玄関のドアが危険である。

児童園ではブランコの構造やその周囲に問題が多い。幼児ではころんで事故をおこすことが多い。

団地内での事故防止対策には日本住宅公団に最も大きな期待をよせている。

以上が最も多くの母親から聞かれた意見であるが、これらは母親の年令別、居住する団地別で多少の相違が認められた。

3. 団地の事故の実態調査

(1) 調査方法並びに対象

主として団地の幼児教室の幼児を対象として、その母親に、附表1（26頁）及3（28頁）のような調査用紙を配つて、乳児期から現在までに、団地のなかで医療を要する事故、あるいはそれに準ずる事故があつたかどうか、もしあつたとすれば、その事故が何才のとき、どこで、誰と、何をしているときに、何によつて、どうして、どの部位

に、どうしたかたちでおこつたか、またその結果はどうであつたか等々、一件の事故について一枚の用紙に必要項目を記入してもらつて回答を求めた。なお事故のなかつた者も、附表1は記入させて、無事故者の数も調査した。調査した団地は、ひばりヶ丘団地、多摩平団地、小金井団地、溜池団地で、ひばりヶ丘、多摩平両団地は団地内集会所で、毎週開かれる幼児教室に入室する幼児の母親に用紙を渡して、翌週来室時までに記入してくるよう依頼し、小金井と溜池団地では両団地の自治会を通じて幼児のいる家庭に用紙を配布して、1～2週後に世話人宅に記入した各自が持参するよう依頼した。

72.3%と甚だ高率であつたが、なかでも、ひばりヶ丘団地では配布数170で回答数145、回収率85.3%、多摩平団地は配布数90、回答数62、回収率68.9%と幼児教室に依頼した場合の回収率は79.6%と極めて高率であつた。自治会に依頼した場合は、小金井団地で用紙配布数100、回答数57、回収率57.0%、溜池団地で配布数40、回答数25、回収率62.5%で両者の合計では、回収率58.6%と幼児教室に依頼した場合よりは回収率が低かつた。

(以上第10表参照)

回答総数289名の中、事故のなかつた者は126名(43.6%)であり、事故のあつた者は163名(56.4%)で、事故の総数は233件であつた。(第10表)

(2) 調査結果並びに考察

1) 調査用紙の配布総数400、回答数289で、回収率は

第10表 各団地別、回答数、回収率並びに事故発生率

団地名	調査用紙配布数	回答数	回収率	無事故者数	%	有事故者数	%	事故件数
ひばりヶ丘	170	145	85.3	58	40.0	87	60.0	122
多摩平	90	62	68.9	34	54.8	28	45.2	38
小金井	100	57	57.0	23	40.3	34	59.7	47
溜池	40	25	62.5	11	44.0	14	56.0	26
計	400	289	72.3	126	43.6	163	56.4	233

第11表 対象者の年齢別性別分類

	0	1	2	3	4	5	6	計
無事故者計	3	9	13	25	69	4	3	126
男	2	6	4	9	39	2	2	64
女	1	3	9	16	30	2	1	62
有事故者計	1	7	13	31	89	15	7	163
男	1	4	11	18	53	5	5	97
女	0	3	2	13	36	10	2	66
総数計	4	16	26	56	158	19	10	289
男	3	10	15	27	92	7	7	161
女	1	6	11	29	66	12	3	128

第12表 性別にみた事故の頻度

	無事故者		事故のあつた者		対象計	事故件数	平均事故件数
	名	%	名	%	名		
男	64	39.7	97	60.3	161	143	0.89
女	62	47.6	66	52.4	128	90	0.70
計	126	43.6	163	56.4	289	233	0.81

第13表 事故の性別、年齢別分類

年齢	男	%	女	%	計	%
0	8	5.6	7	7.8	15	6.4
1	46	32.2	27	30.0	73	31.4
2	32	22.4	28	31.1	60	25.8
3	31	21.6	17	18.9	48	20.6
4	22	15.4	9	10.0	31	13.3
5	3	2.1	2	2.2	5	2.1
6	1	0.7	0	0	1	0.4
計	143	100.0	90	100.0	233	100.0

2) 事故の性別、頻度をみると、回答のあつた289名のうち、男子は161名であつたが、その中、有事故者は97名、60.3%で、無事故者(64名、39.7%)より、事故のあつた者がはるかに多い。一方女子では、回答者128名の中、事故のあつた者66名、52.4%、事故のなかつた者62名、47.6%と、ほぼ同数であつた。(第12表)

3) 対象者の年齢は第11表のようで、4才児が極めて多かつたのは、幼児教室を主とした対象としたためであらう。

事故を起した時の年齢は第13表のようで、1才及び2才が多い。

4) 事故の回数はい人で1件の者が最も多いが、1人で4件という者も2名あつて、第14表のように、163名で、233件、有事故者1名について平均1.44件(男児1.47、女児1.36)の事故が報告された。尚調査対象者全員については第12表の如く1人当り0.81件(男児0.89、女

見0.70)の事故がみられた。

第14表 事故発生回数

事故回数	男	女	計
事故1回の者	61	45	106
// 2 //	28	18	46
// 3 //	6	3	9
// 4 //	2	0	2
有事故者計	97	66	163
事故件数	143	90	233
無事故者数	64	62	126
有事故者の平均事故件数	1:1.47	1:1.36	1:1.44

5) 事故の起つた場所では、第15表のように、屋内が134件(57.5%)で屋外より多く、その中、居間56件(24.1%)が最も多いが、台所23件(9.9%)階段22件(9.4%)、バルコニー18件(7.7%)等がこれにつき、台所での事故が割りに多くみられている。

屋外では児童園での事故が51件(21.9%)と最も多く、道路も31件(13.3%)と可成りみられるが、焼却炉での事故が8件(3.4%)もみられるのは団地特有の事故と云えよう。階段、バルコニー、台所等での事故が多いのも団地に於ける建物の構造の特殊性からくるものと考えられる。

第15表 事故のおこつた場所

		件 数	%
建 物 の 中	玄 関	8	3.4
	台 所	23	9.9
	風 呂 場	4	1.7
	居 間	56	24.1
	バルコニー	18	7.7
	階 段	22	9.4
	廊 下	1	0.4
屋 上	2	0.9	
小 計		134	57.5
建 物 の 外	道 路	31	13.3
	芝 生	3	1.3
	児 童 園	51	21.9
	焼 却 炉	8	3.4
	駐 車 場	6	2.6
小 計		99	42.5
計		233	100.0

6) 事故のおこる動機(第16表)では、落ちる(29.6%)と、ころぶ(23.6%)が多く、この両者は、昨年度報

告した一般家庭の乳幼児の事故の際にも多くみられた動機であつたが、団地では「ころぶ」より「落ちる」が多くみられた「ぶつかる」「ふれる」は何れも屋内での事故が殆んどで団地の室内が狭いことが遠因となつてみられる事故のようである。

第16表 事故の起つた動機

	件 数	%
落 ち る	69	29.6
こ ろ ぶ	55	23.6
ぶ つ か る	45	19.3
切 る	11	4.7
打 つ	14	6.0
ふ む	17	7.3
は さ む	2	0.9
ふ れ る	16	6.9
さ す	4	1.7
計	233	100.0

7) 第17表は「何をしていて事故にあつたか」を分析したものである。

事故が遊んでいるときに発生したものが、170件(72.8%)で最も多いのは、子どもの生活習慣からみて当然のことであろうが、歩いているときの事故も36件(15.5%)と可成り多く、特に1才児と2才児に目立っていた。一方寝ているときの事故が3件あるが、何れも0才児の事故で、しかも受身のかたちの事故ばかりであつた。

抱いていて頭をぶつかけたり、ころんだ事故は2件あるが、おぶつていて事故がなかつたのは、おぶう機会がないためであるのか、おぶつていることが事故防止の点で有利なためかは不明である。食事時の事故は1才児に多くみられた。

8) 事故をおこしたときに一緒にいた人については第18表のようで、子どもが独りでいるときの事故は28件(12.0%)と団地では独りでいる場合の事故が、わりに少ない。母親と一緒にいる場合は、39.9%で、0才児、1才児では比較的多いが、2才児以上になると母親と一緒にいる際の事故は減つて、友達と一緒にいる際の事故が多くなつてくる。各年令を通じて父親と2人のとき、或いは、父母と一緒にいるとき等と、父親が事故の現場にいる場合が団地では多いようである。

9) 事故がおこつたとき母親がどこで何をしていてかという問に対しては第19表のようで、一緒にいたという者が84名(36.1%)で、先の質問で、母親と一緒に、或いは両親と一緒にいるとき事故が起つたと答えた者の数と大

分ひらきがあるが、一緒にはいたが、児童園で自分は編物をしていたとか、階段で掃除をしていたという母親がいたためであった。母親が子どもと離れたところで、仕事をしていたという答えは、年長児ほど多くなっている。

第17表 事故をおこしたときの行動

年 令	0		1		2		3		4		5		6		計	
	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%
遊んでいるとき	12	80.0	45	61.6	41	68.3	39	81.3	27	87.1	5	100.0	1	100.0	170	72.8
食事中	0		9	12.4	1	1.7	0		0		0		0		10	4.3
寝ているとき	3	20.0	0		0		0		0		0		0		3	1.3
入浴中	0		1	1.4	0		1	2.1	1	3.2	0		0		3	1.3
抱いているとき	0		2	2.7	0		0		0		0		0		2	0.9
歩いているとき	0		13	17.8	15	25.0	6	12.5	2	6.5	0		0		36	15.5
おぶついているとき	0		0		0		0		0		0		0		0	
その他	0		3		3	5.0	2	4.1	1	3.2	0		0		9	3.9
計	15	100.0	73	100.0	60	100.0	48	100.0	31	100.0	5	100.0	1	100.0	233	100.0

第18表 事故をおこしたときの同伴者

年 令	0		1		2		3		4		5		6		計	
	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%
大人(複数)	0		4	5.5	4	6.7	3	6.3	2	6.4	0		0		13	5.5
両親	0		7	9.6	5	8.3	3	6.3	1	3.2	0		0		16	6.8
父	3	20.0	7	9.6	9	15.0	4	8.3	2	6.4	0		0		25	10.5
母	9	60.0	42	57.6	21	35.0	15	31.2	4	12.9	1	20.0	0		92	39.9
大人(父母以外)	0		2	2.7	4	6.7	1	2.1	2	6.4	0		0		9	3.9
同胞	0		0		2	3.3	2	4.1	1	3.2	0		0		5	2.1
友達	0		2	2.7	11	18.3	17	35.4	12	38.9	2	40.0	0		44	18.9
独り	3	20.0	9	12.3	4	6.7	3	6.3	6	19.4	2	40.0	1	100.0	28	12.0
無答	0		0		0		0		1	3.2	0		0		1	0.4
計	15	100.0	73	100.0	60	100.0	48	100.0	31	100.0	5	100.0	1	100.0	233	100.0

第19表 事故のおこったとき母親はなにをしていたか

年 令	0		1		2		3		4		5		6		計	
	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%
一緒にいた	7	46.7	32	43.9	24	40.0	16	33.4	4	12.9	1	20.0	0		84	36.1
同じ部屋で仕事をしていた	2	13.3	20	27.4	5	8.3	4	8.3	3	9.7	0		0		34	14.5
離れたところにいた	6	40.0	19	26.0	27	45.0	27	56.2	20	64.5	1	20.0	1	100.0	101	43.4
留守であった	0		2	2.7	4	6.7	0		4	12.9	3	60.0	0		13	5.6
その他	0		0		0		1	2.1	0		0		0		1	0.4
計	15	100.0	73	100.0	60	100.0	48	100.0	31	100.0	5	100.0	1	100.0	233	100.0

10) 事故の原因物件としては、第20表のように、石が55件(23.6%)で最も多く、ついで遊具45件(19.3%)が多かった。遊具の中ではブランコが一番多く、遊具による事故のはほぼ半数を占めている。熱いものにぶれてやけどをしたと思はれるもの、建具や家具による事

故もかなりみられた。ガラス片によるものも18件(7.7%)がみられた。建具の中では窓、或いは、ガラス戸が非常に多く、先の認識調査で多く挙げられていた扉による事故は、この調査の範囲では一例もみられなかった。



第20表 原因となつた物件

物 件	件 数	%
石	55	23.6
ガラス	18	7.7
木片	5	2.1
玩具	12	5.2
建具	26	11.2
家具	24	10.3
熱いもの	28	12.0
遊具	45	19.3
（ブランコ スベリ台 鉄棒 その他	22	9.4
	7	3.0
	6	2.6
その他	10	4.3
自転車・自動車	4	1.7
その他	10	4.3
無答	6	2.6
計	233	100.0

11) 傷をうけた部位では第21表のように、顔が109件(46.9%)で最も多いが、この中ひたいが一番多く、口唇、乃至は、口の中がこれについていた。頭と手はほぼ同数であつたが、0才、1才では頭が多く、2、3才児に手が多かつた。

第21表 傷を受けた部位

部 位	件 数	%
頭	45	19.3
顔	109	46.9
手	44	18.9
足	31	13.3
軀幹	2	0.8
無答	2	0.8
計	233	100.0

12) どんな傷であつたかという項目では第22表のように切傷100件(43.0%)が断然多く、打撲傷(16.3%)、擦過傷(12.9%)がこれについている。

第22表 事故の種類

	件 数	%
やけど	27	11.6
切傷	100	43.0
擦過	30	12.9
捻挫	6	2.6
骨折	10	4.3
脱臼	7	3.0
咬傷	2	0.8
窒息	2	0.8
刺傷	3	1.3
打撲	38	16.3
血答	5	2.1
無答	3	1.3
計	233	100.0

13) 第23表は月別の事故発生数であるが、これによると団地の事故は初夏から秋にかけてやや多くみられ、冬は比較的少ない。

第23表 月別事故発生数

月	件 数
1	17
2	10
3	15
4	18
5	21
6	20
7	23
8	20
9	24
10	23
11	24
12	18
計	233

14) 事故が防げたかと思うかという問に対しては第24表のように167件(71.6%)が防げたかと思うと答えてい

第24表 事故が防げたかと思うかどうか (母親の意見)

年 令	0		1		2		3		4		5		6		計	
	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%	件	%
防げたと思う	14	93.3	54	74.0	45	75.0	35	73.0	15	48.4	3	60.0	1	100.0	167	71.6
防げないと思う	0		8	10.9	3	5.0	4	8.3	3	9.7	1	20.0	0		19	8.2
わからない	1	6.7	7	9.6	6	10.0	4	8.3	4	12.9	0		0		22	9.5
事故をみていないのでわからない	0		4	5.5	6	10.0	5	10.4	9	29.0	1	20.0	0		25	10.7
計	15	100.0	73	100.0	60	100.0	48	100.0	31	100.0	5	100.0	1	100.0	233	100.0

る。事故をみていないのでわからないという者は全体では25件(10.7%)で、これは4才児の事故に一番多い(4才児の29.0%)。団地では、一寸した母親の注意で防げたと思はれる事故が極めて多いようである。

(3) 小 括

ひばりヶ丘等、4団地の幼児が団地内でおこした過去の事故で、母親の記憶に残っているものの中から、医療を必要とするほどの事故、233件について、種々の要素について分析した結果、団地に於ける乳幼児の事故は秋に比較的多く、冬はやや少ない傾向がみられた。

建物の内の事故が多く、その中では居間が最も多く、台所、階段がこれに次いで多くみられた。

事故の動機では、〃ころぶ〃より、〃落ちる〃が多い、遊んでいるときの事故が最も多く、母親が一緒のときの事故が多いが、一般家庭に較べて父親が一緒のときも可成り多く、子どもが独りでいて事故をおこす場合は比較的少ない。

事故の原因となる物件としては、石が最も多く、児童園の遊具がこれについている。遊具の中では、ブランコの事故が多い。

傷の種類では、切傷が最も多く、傷を受ける部位では顔が一番多かつた。防げたと思う事故が71.7%を占めていた。

4. 総 括

団地に於ける乳幼児の事故について、母親の認識調査と、事故の実態調査とを行つた結果、事故の発生する場所と、動機とに、両者の相異がみられた。即ち事故の発生する場所として、階段が最も多いと考えている母親が多いが、実際には居間が事故の多発する場所である。また、ころんで起こる事故が最も多いと考えている母親が多いが、実際には、落ちる事故が多い。事故を起す頻度の高い諸項については認識調査、実態調査の夫々小括に述べた。

附表1 一般調査(全員)、調査用紙

C用紙	団地における乳幼児の事故の調査									
1. 調査年月日	昭和	年	月	日	2. 調査対象者氏名					
3. 団地名	棟	号	4. 入居	昭和	年	月	より	年	月	間
5. 同居家族										
名	前	男女別	続柄	職	業	生	年	月	日	
6. 母の職業										
無……………育児に専念できる・雑事が多い										
有……………毎日通勤・パートタイム(週回、1回 時間)・その他( )										
母留守中の保育者……祖父母、お手伝い、近所又は保育所にあずける、その他( )										



附表3 事故の実態調査、調査用紙

B用紙

団地における乳幼児の事故の調査

該当項目に○印をつけて下さい  
 一件の事故について一枚の用紙を御使用下さい

1. 傷を受けた時はいつですか  
 昭和 年 月 頃 朝・午前・午後・夕方・夜 満 才 ケ月  
 但し はつきりおぼえて居られる方は日時もお書き下さい ( 月 日 午前午後 時)
2. どんな場所で傷を受けましたか  
 家内 ① 玄関 ② 台所 ③ 風呂場 ④ 居間 ⑤ パルコニー ⑥ 階段  
 ⑦ おどり場 ⑧ その他 ( )  
 家外 ⑨ 道路 ⑩ 芝生 ⑪ 児童園 ⑫ その他 ( )
3. どうして傷を受けましたか  
 ① 落ちる ② ころぶ ③ ぶつかる ④ 切る ⑤ 打つ  
 ⑥ ふむ ⑦ その他 ( )
4. どんなことをしている時傷を受けましたか  
 ① 遊んでいるとき ② 食事中 ③ 寝ているとき ④ 入浴中 ⑤ 歩いているとき  
 ⑥ 抱いているとき ⑦ おぶついているとき ⑧ 泣いているとき ⑨ その他 ( )
5. その時、お母様は何をして居られましたか  
 ① 一緒にいた ② 同じ部屋で仕事をしていた ③ 離れたところで仕事をしていた  
 ④ 留守であつた ⑤ 眠っていた ⑥ その他 ( )
6. どんなもので傷を受けましたか  
 ① 石 ② ガラス ③ 木片 ④ 玩具 ⑤ 建具 ⑥ 家具 ⑦ 遊具 (aブランコ  
 bスベリ台 c鉄棒 dその他 ( )) ⑧ その他 ( )
7. 傷を受けた時一緒にいた人は  
 ① 父 ② 母 ③ 友達 ④ 独り ⑤ その他 ( )
8. どんな傷でしたか  
 ① やけど ② きり傷 ③ すり傷 ④ くじく ⑤ 骨折 ⑥ 関節がはずれる  
 ⑦ かまれる ⑧ 息がつまる ⑨ その他 ( )
9. 傷を受けた部位はどこですか  
 ① 頭 ② 顔 (目 耳 鼻 口 ひたい あご ほほ) ③ 手 ④ 足 ⑤ 胸 ⑥ 腹  
 ⑦ 背 ⑧ その他 ( )
10. 傷の手当はどうしましたか  
 ① 医師にかかった ② 家で手当した ③ 放つておいた
11. 傷以外の事故の場合は、この項に御記入下さい。(例えば、飴がのどにつかえた・ボタンをのんだ・耳に小豆が入った等なるべく詳しく)
12. その事故は防げたと思いますか  
 ① 思う ② 思わない ③ 解らない ④ 事故をみていなかったなので解らない

お子様のお名前

① 男 ・ ② 女

NO.

生年月日 昭和 年 月 日 日生

## VI 団地における母子関係

### 1. 目 的

都市周辺に団地が急増し、社会環境として団地の問題が、あれこれとあげられている。家庭の教育、とくに母親と子どもの関係には、団地に生活するということが影響があるのだろうか。

日本語では、「家」と「庭」を結びあわせて「家庭」というが、団地住いでは、「家庭」の「庭」の方は、当然のことながら公共の場になっている。こうしたことが、母と子を、社会に解放的に向けるようになるか、それとも逆に「籠」の中に閉じこめる傾向になつていくのか。

限られた場面を通してではあるが、一般家庭と比較しながら、団地の母子関係の特殊性をみようとするのが、

この研究の目的である。

### 2. 対 象

団地は、東京都周辺地に在する団地、新所沢、赤羽台、東久留米、豊四季、東伏見の各団地である。一般家庭は、当研究所来所者のうち、精神薄弱、言語障害などの特殊のケースを除外したものを対象とした。

子どもの年齢は、2歳0月から6歳までのものを対象とした。総計は、第1表の対象児とその母親であり、396組である。

本研究は、1964年5月から予備検査を行ない、実際の検査は1964年9月から1965年2月にわたって施行した。

第1表 対 象 児

群	年 令		2 歳		3 歳		4 歳		5 歳		6 歳		計					
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計			
団 地	27	29	56	31	30	61	24	24	48	14	19	33	5	5	10	101	107	208
一 般 家 庭	8	13	21	20	32	52	28	22	50	15	24	39	14	12	26	85	103	188
計	35	42	77	51	62	113	52	46	98	29	43	72	19	17	36	186	210	396

### 3. 方 法

(1)

母親が、子どもにどう接するかをみるために、母親の前で検査者が子どもに課題をあたえて、母と子どもの行動を観察する。検査室には、検査者1名、母親と子どもが入室する。このばあい、母親が検査の結果に影響を与えるような行動やことばを発しても、一切禁止しない。

(2)

つぎに、母親を室外に待機させ、子どもに乳幼児精神発達検査、またはビネー検査(子どもの年齢と能力によって、どちらを選ぶかはきまる)をおこなう。検査施行と同時に子どもの検査時の行動を観察する。

(3)

子どもに与える課題(母と同室のときあたえるもの)は、予備検査によつて、2歳児から6歳児にわたる知能検査に類した問題を12問作成した。うち、6問は言語検査で、検査者の質問に子どもがことばで答える。他の問題は動作性検査である。これは、赤、青、黄の1.5cm四方のカードを21枚(各色7枚づつ)子どもの前におき、刺戟板の空欄に適当と思うカードをおかせる検査で

#### 検査問題

No.		1964年 月 日 被験児	
士	A 了解問題	士	B 色 合 せ
1.	(1) おなかがすいたときにはどうしますか。	(1)	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
	(2) 眠たいときにはどうしますか。	(2)	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
2.	(1) もしあなたがどこかへ出かけるときに、雨が降っていたらどうしますか。	(1)	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
	(2) もし、あなたの家が火事になつてもえているのをみつけたらどうしますか。	(2)	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
3.	(1) もし、あなたが何か人の物をこわしたときにはどうしますか	(1)	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
	(2) もし、あなたのお友だちがうっかりしてあなたの足をふんだときにはどうしますか	(2)	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
□—赤 △—黄 ⊙—青			

ある。

課題は、子どもの能力や年齢を考慮し、その子に少しむずかしいと思われるものを言語性2問、動作性2問、計4問施行する。なぜなら、非常に問が簡単であると、母親は安心して、何の反応もしめさないからである。

検査結果は、子どもの答えを記入し、合格・不合格を記しする。

子どもに与える課題(検査問題)は、前頁掲載のもの

である。

(4) 行動観察

母親の態度25項目、子どもの態度25項目、計50項目を用意し、母の行動、子どもの行動、母が一緒のときと母とはなれたときの子どもの行動の変化を観察し、記録する。次の行動目録は予備検査の結果、えらび出した50項目である。

<p>No. _____ (検査月日 年 月 日)</p> <p>被験児: _____ (男・女)</p> <div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px; margin: 5px 0;">C</div> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. さつさとはいる。</li> <li>2. 母にうながされて入室。</li> <li>3. 入室をいやがる。</li> <li>4. 椅子にかける。</li> <li>5. 立っている。</li> <li>6. 母を呼ぶ、ひつばる。</li> <li>7. 母にくつついている。</li> <li>8. 母の後ろにかくれる。</li> <li>9. 泣く。</li> <li>10. 母を気にしない。</li> <li>11. 母の干渉をいやがる。</li> <li>12. 母に自慢する、いばる。</li> <li>13. 母をみながらこたえる。母を気にする。</li> <li>14. 母にだけ小声でしゃべる。</li> <li>15. 母の顔をみて答えをもとめる。</li> <li>16. 母にやらせようとする。</li> <li>17. 母の方をむいてテスターの方を向かない。</li> <li>18. 母に反抗する。</li> <li>19. 母に叱られて泣く。</li> <li>20. 母と別れる。</li> <li>21. 母を追う。</li> <li>22. 母とはなれない。</li> <li>23. 母と一緒にのときと変りない態度。</li> <li>24. 母と別れ、かえつて積極的になる。</li> <li>25. 母と別れ、急に消極的になる。</li> </ol> <p>備 考</p>	<p>検査者( _____ )</p> <p>同伴者: 母、その他( _____ )</p> <p>(生年月日: 年 月 日) 出生順位: 第 _____ 子</p> <p>年令: _____ 才 _____ 月</p> <div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px; margin: 5px 0;">M</div> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 子どもとはなればなれではない。</li> <li>2. 手をつないでいる。</li> <li>3. うながしてはいる。</li> <li>4. ムリヤリつれてはいる。</li> <li>5. 抱いてはいる。</li> <li>6. 母の椅子にそのままかける。</li> <li>7. 子どもの着席に世話をやく。</li> <li>8. 態度や挨拶などの注意をする。</li> <li>9. 子どもを抱く。</li> <li>10. だまつてみている。</li> <li>11. 問をくりかえして子どもに伝える。</li> <li>12. 問をいいかえたり、補足する。</li> <li>13. 答えを暗示したり、子どもの間違いを指摘する。</li> <li>14. 子どもの答えや態度をはずかしそうに笑う。</li> <li>15. 子どもの答えをからかつたり、笑つたりする。</li> <li>16. ほめる。</li> <li>17. 子どもの答をうながす。</li> <li>18. おだてたり、すかしたりする。(物でつる)</li> <li>19. おどしたり、叱つたりする。</li> <li>20. 子どもを弁護する。(問がむずかしい、いつもはできる、etc.)</li> <li>21. 間違いを訂正したり、答えを教える。</li> <li>22. 手助けをする。やつてやる。</li> <li>23. 子どもが答えを求めても知らん顔をしている。</li> <li>24. 子どもに聞かれ、うなずいたり、首をふつたりする。</li> <li>25. 子どもに聞かれ、自分でやれという。</li> </ol>
---	---

4. 結 果

(1) 母親の態度

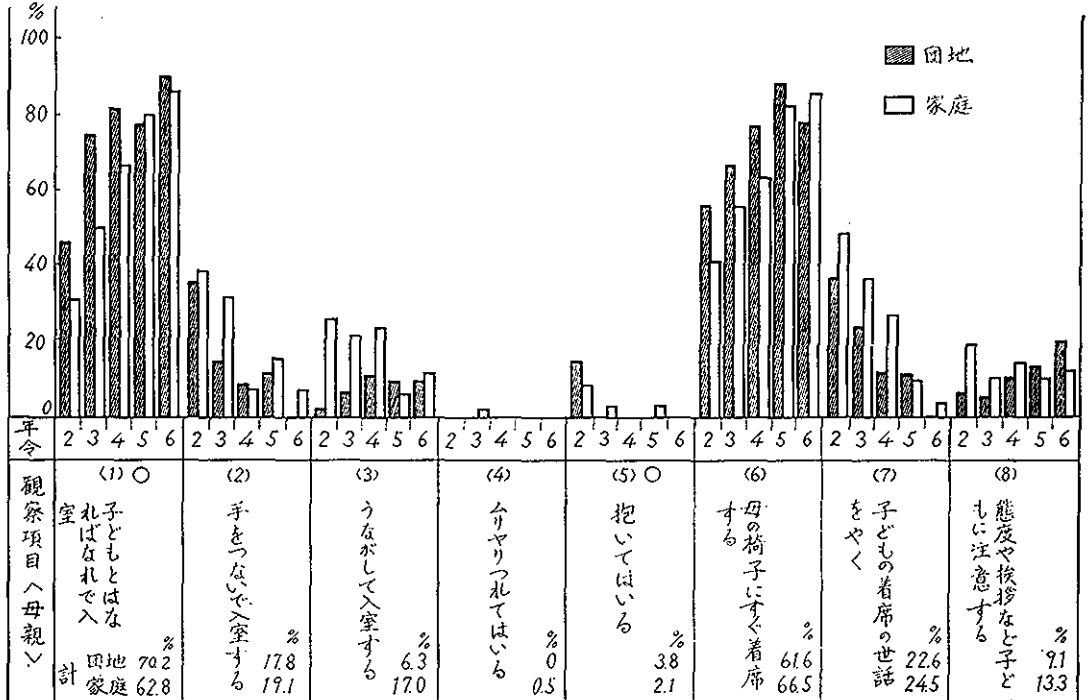
1) 一般家庭の母親と団地の母親の子どもにたいする態度のちがいをみるために、各項目について、年齢別にその比率をだしてみた。第1図、第2図、第3図がそれである。家庭と団地を問わず、年齢に準じて変化しているものは、1)、6)、5)、7)、11)の各項である。1) 子どもとはなれて入室する、6) 母の椅子に着席する、は年齢が大きくなるにつれ、増している。逆に年齢が小さいほど多くなる態度は、5) 抱いてはいる、7) 子どもの着席の世話をやく、1) 検査者の問をくりかえして子どもに伝える、である。家庭群、団地群ともに、9) 子どもを抱く、18) おだてたり、すかしたりする、は年齢の小さいものだけにみられた。また、両群ともに、20) 子どもを弁護する、21) 間違いを訂正したり、答えをおしえる、の2項目は、2歳児に多く一度減少してまた5～6歳児に多くなっている。つぎに団地と家庭両群の年齢的取扱いにちがいのあるものをみてる。団地群では、3) うながして入室する、8) 態度や挨拶など子どもに注意する、が年齢が高くなるにつれ増えているが、家庭群は年齢差があまりなく、3) のばあいむしろ逆に年齢の低いものに多くなっている。家庭群では年

令が大きくなるにしたがつて、12)、13)が減少して、10)だまつてみている、が増していくが、団地群では年齢的ながいあまりみられない。

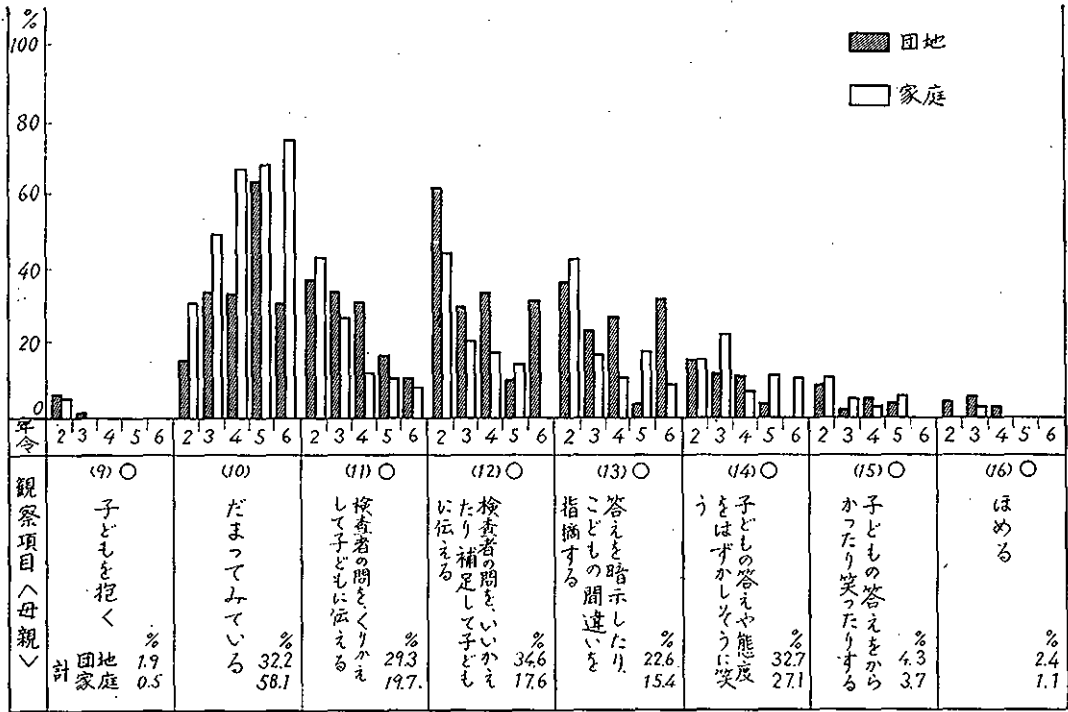
以上は、年齢的な変化を比較したのであるが、つぎに各年齢を合計して、項目ごとの比較をしてみる。第1図から第3図の最下欄右にしめたものがそれであり、上段が団地の%、下段が一般家庭の%である。なお、団地の方が家庭群より多いものに、図の項目番号右に○印をした。

2) 各項目について両群の比較をするばあい、両群の各年齢の人数割合が異つていれば、年齢による母親の扱い方のちがいが因子としてはたつき、その差を考察することができない。これは、結果(1)の1)からもいえることである。われわれの対象となつた被検児全体(第1表参照)をみると、団地群は家庭群とくらべて2歳児が多く、6歳児が少ない。3～5歳児は両群ともほぼ同数である。そこで、2歳児と6歳児の資料を除き、3～5歳児の合計によつて、両群の比較をすることとした。つまり、団地群142名、家庭群141名、合計283名を対象としたものである。各項目ごとに両群に差があるかどうか、その差が意味のあるものかどうか、 $X^2$ 検定をおこなつた。その結果は第2表に示すとおりである。 $X^2$ 検定の結果、危険率5%以内で有意差のあるもの、および危険

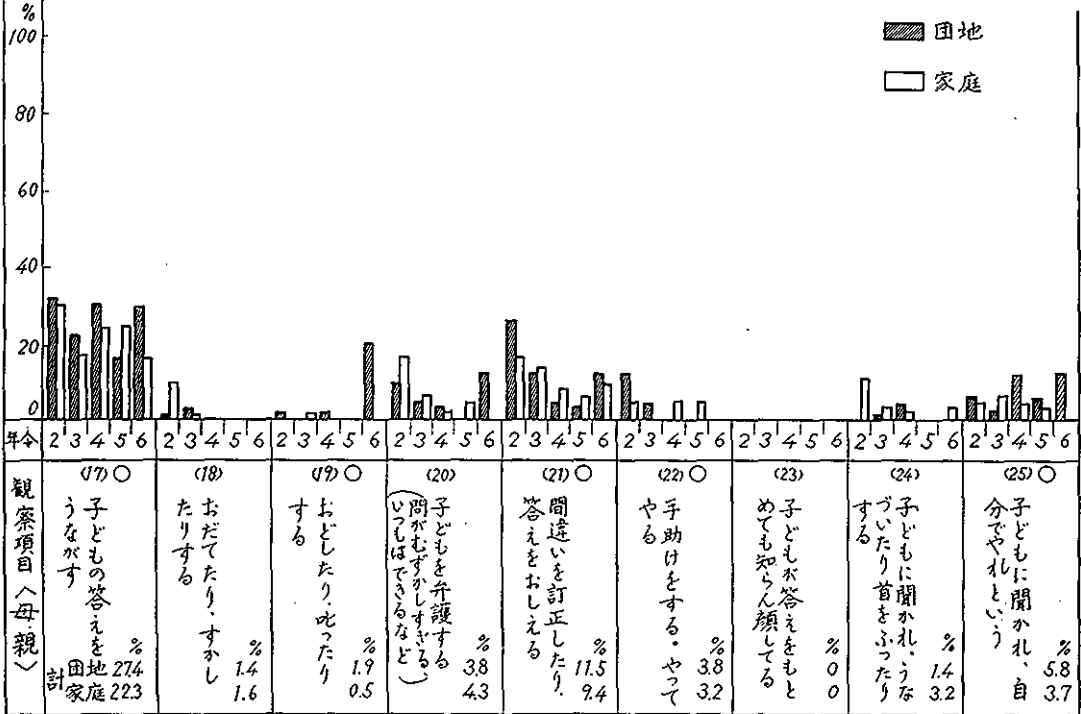
第1図



第2図



第3図





率20%以内で差が出たもの、有意味の差が出なかつたもの、の三段階にわけて項目の左に印をした。表の項目の左の●印は、危険率5%以内で、団地の方が家庭より多いといえるもの、○印は危険率10%から20%で差の出たもので団地の方が多くのものである。おなじく▲印、△印は、家庭の方が団地より多くて有意味の差のあつたものである。両群に有意の差のみられなかつたものは無印である。つまり、●(▲)、○(△)、無印の三段階である。この結果、●印の項目すなわち団地の母親が家庭の母親よりも明らかに多かつたものは、1)子どもとはなればなれで入室する、6)母の椅子にすぐ着席

する、11)検査者の間をくりかえして子どもに伝える、の三項目であつた。12)検査者の間をいいかえたり、補足して子どもに伝える、ものも団地の母に多かつた。▲印の項目、つまり、家庭の母親に団地の母親より多くみられた態度は、3)うながして入室する、10)だまつて検査をみている。14)子どもの答や態度をはずかしそうに笑う、の各項目であつた。7)子どもの着席に世話をやく、も家庭の母により多かつた。結局、入室時や着席の世話をやくことでは、家庭の母親の方が多く、検査中に世話をやくことでは団地の母親に多かつた。

第2表

	(N142)	(N141)	X <sup>2</sup>	危険率
	団地	家庭		
● 1) 子どもとはなればなれで入室	111	90	7.07	P<.01
△ 2) 手をつないで入室	17	26	2.30	.2>P>.1
▲ 3) うながして入室	11	24	5.61	.02>P>.01
4) ムリヤリつれて入る	0	1	0.00	
5) 抱いてはいる	0	2	0.51	
● 6) 母の椅子にすぐ着席する	110	93	4.62	.05>P>.02
△ 7) 子どもの着席の世話をやく	26	35	1.77	.2>P>.1
8) 態度や挨拶など子どもに注意する	13	17	0.45	
9) 子どもを抱いてはいる	1	0	0.00	
▲ 10) だまつて検査をみている	56	84	11.48	P<.01
● 11) 検査者の間をくりかえして子どもに伝える	39	25	3.83	P=.05
○ 12) 検査者の間をいいかえたり、補足して子どもにいう	35	24	2.49	.2>P>.1
13) 答を暗示したり、子どもの間違いを指摘する	25	18	1.29	
▲ 14) 子どもの答や態度をはずかしそうに笑う	13	27	5.82	.02>P>.01
15) 子どもの答えをからかつたり笑つたりする	4	5	0.00	
16) ほめる	4	1	1.47	
17) 子どもの答えをうながす	35	31	0.28	
18) おだてたり、すかしたりする	2	1	0.00	
19) おどしたり、叱つたりする	1	1	0.50	
20) 子どもを弁護する(間がむずかしい、いつもはできるなど)	4	5	0.00	
21) 間違いを訂正したり、答を教える	9	12	0.07	
22) 手助けをする、やつてやる	2	5	0.60	
23) 子どもが答えをもとめても知らん顔をしている	0	0	0	
24) 子どもに聞かれ、うなづいたり、首をふつたりする	3	3	0.16	
25) 子どもに聞かれ、自分でやれという	8	6	0.67	

(2) 子どもの態度

1) 団地と一般家庭の子どもの態度を各項目ごとに比較すると、第4図、第5図、第6図となる。各年令ごとに

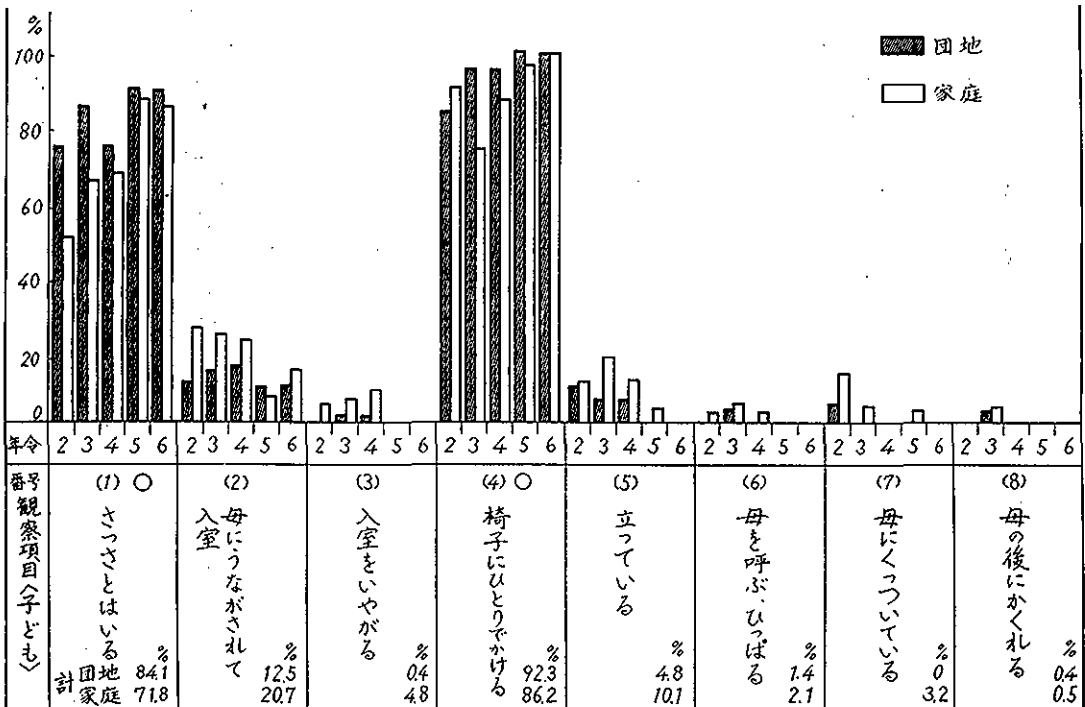
百分比で示したものである。観察項目欄の右下に記入した数字は、各年令を合計して算出した比率で、上段が団地、下段が一般家庭である。なお、この比率が団地の方

が家庭より多いものに、観察項目番号の右に○印を付した。この図より、年令的な変化を団地と家庭とで比較してみるとつぎのようになる。一般家庭の子どもが年令が高くなるにつれて多くなるのに、団地の子どもは年令的ながいのみみられないものは、1) さつさと入室する、20) 母と別れる、23) 母と一緒にのときと変りない態度の三項目であつた。また、一般家庭の子どもが年長になるにつれて減少し、団地の子には年令的变化がはつきりあらわれないものは、2) 母にうながされて入室する、15) 母の顔をみて答えをもとめる、22) 母とはなれない、の3項目である。さらに、家庭の子どもが年令が長じるにしたがい減少しているのに、団地の子どもは逆に年令とともにふえる態度、24) 母と別れてかえつて積極的になる、がみられた。両群ともに年令とともに減じるものは、16) 母にやらせようとする、であつた。一般に年令的な変化は、家庭群に多く、団地群には少ない。両群の年令的な変化の共通点は、母親の態度とくらべ、子どもの態度に共通するものが少なかつた。

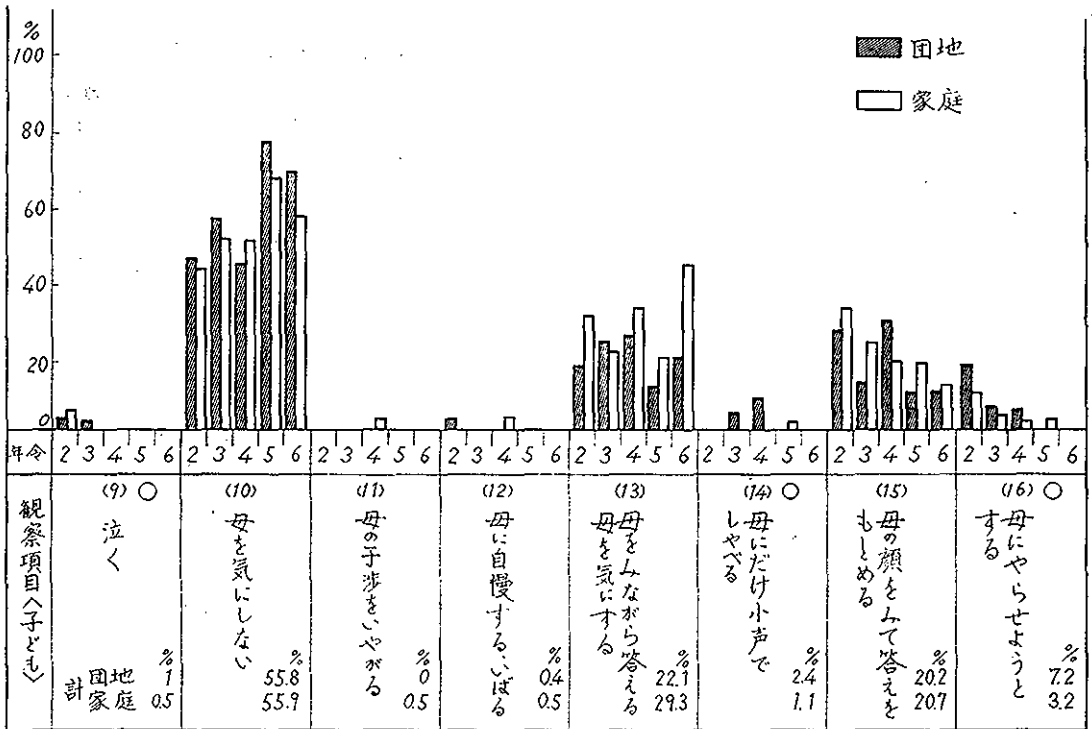
2) 団地群と一般家庭群の子どもの態度を各項目によつて比較する。年令を合計することになるが、団地群では2歳児56名にたいし家庭群21名、6歳児は団地10名にたいし家庭群26名であり、団地は2歳児が多く家庭は6歳児が多い。このままでは、年令の高い低いと

いうことが含まれて厳密な比較ができない。したがつて、母親の態度のばあいと同様、2歳、6歳の対象児を除外して、3・4・5歳を集計したもので検討することとした。2歳と6歳をのぞくと、団地142名、家庭141名となる。この両群を各項目ごとにX<sup>2</sup>による差の検定をおこなつた。第3表が各項目のX<sup>2</sup>検定の結果である。危険率5%以内で有意の差があるといえるものに、観察項目番号の左に印を付した。●印は団地の方が家庭より多いといえるもので、▲印は家庭の方が団地より多いといえるものである。なお、母親の態度(結果(1)2)、第2表参照)では、5%以内の有意差でないもので、相当の差(20%以内危険率)のあつたものが3項目(○、△印)あげられたが、子どもの態度にはあらわれなかつた。すなわち、子どもの態度の方が母親の態度よりも、団地と家庭のちがいのある項目が少ない。子どもの態度で明らかなる両群のちがいがみられたものは、1) さつさと入室する、は団地群に多く、3) 入室をいやがる、5) 椅子にかけずに立っている、24) 母と別れてかえつて積極的になる、の4項目が家庭群に多い。つまり、団地の子どもは家庭の子よりも検査室へ入るときの緊張が少なく、また、母と一緒にのときと母が室外に出て、ひとりて検査をうけるときの態度に変化がみられなかつたのも団地の子どもたちであつた。

第4図



第5図



第6図

